
そこに想いがあるのなら

絳月葩鶴土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そこに想いがあるのなら

【Nコード】

N3794S

【作者名】

緯月葩鶴士

【あらすじ】

思えばあの時から、あたしの運命は決まっていたのかもしれない。中学三年生になり、迎えた始業式。

その帰り道、あたしは交通事故に巻き込まれた。

事故の後遺症か、両目は視力を失い、光は閉ざされたはずだった。それなのに。あたしの脳内には、鮮明に皆の姿が映っていて……。

目には見えない物を見通すという、不思議な力を持った少年少女は、その力を世の為人の為に有効活用しようと、探偵事務所を設立する。

そこで彼らを待ち受ける数々の事件とは――
これは、そんな彼らの青春の一幕。

きっかけは事故（前書き）

新連載スタートです！

中学生だった頃を思い出して書いてみました。割と甘酸っぱい？青春ものに仕上がる予定。

きっかけは事故

「やだっ……最悪……」

思えばあの時から、あたしの運命は決まっていたのかもしれない。空は青く澄み渡り、柔らかい風が気持ちよく吹き抜ける朝。周りの皆は跳びはねたり、落ち込んだり、色々な反応をしている。そんな中、あたしだけが一人、ある一点から瞳をそらせずにいた。

「なんでよりにもよって、あいつと一緒になのよおおおおおおおおおおおおおおお」

心の声は叫び声となり、辺りにこだました。

そんな衝撃的なシーンから始まってしまったけど、一応自己紹介を。何事も最初が肝心、という事で。

あたしは水^{みず}鳶^{しまも}桃香^か。この春から中学3年生になる。いわゆる受験生の仲間入りを果たしてしまった訳だが、別に後一年あるし、と強がってみたりしている。今から憂鬱になっていてはこの先もたないし、そもそもあたしの場合は、そんな気分なんてこの満開の桜を見れば飛んでいってしまうのだから。学校の良い所って、こういうところだと思う。そんな訳で、道端のタンポポやスマレに春の訪れを感じつつ、春休み明け最初の登校日は、意気揚々と元気な足取りで通学路を進んだ。

そうして迎えた始業式。久々に制服の袖に腕を通し、期待に胸を膨らませ、通い慣れた学校に来たのは良いものの、そこでとんでもなく、とてつもなく嫌なものを見てしまった。

クラス替えの結果である。

我が中学では何故か毎年クラス替えがあり、各自が下駄箱前の掲示板上で確認する事になっている。それに倣い、人ごみをかき分けつつ、表の前まで向かった。そして見た途端に、あたしは鞆を取り落とした。それこそ、合格発表の掲示板上に自分の番号が無かった受験

生みたいに。いや、無かった訳ではない。流石に、あたしの名前はあった。ただそこに、余計なものまで書いてあったのである。

あたしの宿敵、湖山の名前が。

奴はその名を湖山優こやまゆうと言い、勉強もそこそこ出来、スポーツ万能、容姿もなかなか。おまけにサッカー部のエースという事もあって、女子の評価は高い。あたしも第一印象は、名前通りの優しそうな人だと思ってしまう程であった。しかし話してみると、プライドの高い感じがよく分かる。いかにも人を見下したような、上から目線の喋り方をするのだ。しかも責任転嫁が上手く、決して自分には厄介事が回って来ないようにしている。それが分かったのは、奴と顔を合わせてから何度目が経った、ある日の事だった。

その日はいつものように、月に一回の全委員会の代表者が集まる会議に行く為、理科室へ向かった。あ、言い忘れていたが、去年まであたしは学級委員をやっていて、湖山とはそこで出会ったのである。すると、その道中、後ろから声を掛けられた。

「水島さん」

「湖山君、どうしたの？」

振り返るとそこには、マスクをしていかにも具合が悪そうにしている湖山がいた。

「ごめん、実は今風邪ひいててさ。今日の報告、代わってくれないかな？」

「それは良いけど、大丈夫？」

「ああ、うん。じゃ、これ資料ね。よろしく！」

病人の割には嫌に早い速度でファイルを押しつけ、彼はそのままあたしを追い抜かして、先に室内へと入っていった。何故、この時あたしは奴を疑わなかったのか。未だに思い出すと悔やまれて仕方が無い場面である。

そうして、あたしは何故か湖山の代わりに定期報告をやる事にな

ったのだが、その内容が最悪だった。実はその月、挨拶運動をやるのが二年生学級委員の仕事だったのだが、行事やら何やらで結局出来ずじまいになってしまったのである。いやまあ、間接的には同じ委員であるあたし達にも責任はあった。だが、他の学年や委員会が黙ってはくれない。皆、同じ条件の中で、学校を良くしていく為に仕事をしているのだ。あたしは頑張つて説明し、あちこちから拳がるヤジに真摯に対応した。その結果、来月に側溝掃除も一緒にやるという事で、どうにか話を着けられた。

会議が終わり、皆にねぎらいの言葉をもらったあたしは、へとへとになりながら教室に戻った。そして、帰り支度をしている途中、またもや後ろから声を掛けられる。もう聞きたくもない、嫌味にしかとれない声だった。

「君なら上手くやると思っていたよ。頼んで正解だった」

わざわざあたしのクラスまで来た事は評価に値するが、その台詞から化けの皮が剥がれている事は言うまでも無い。しかも教室の中にまで入り込み、お疲れ様とでも言いたいのか肩を叩かれそうになったので、バスケのピポットの要領で華麗にかわしてやった。あんな奴に触られる事が嫌だったのだ。まあ、その為にあたしはそれまで振り向かず、その時になって初めて、対峙する格好となった訳で。しかし奴は、まるでそうなる事を予期していたように、特に食いつ下がる事も無くそのまま去っていった。むしろ、思ったより顔が近くにあつて一歩後ろに引いてしまったあたしの方が、情けなかっただろう。

そしてあたしは、あの日から奴を君付けで呼ぶのを止めた。

まあその後も本性を現した湖山は、何かにつけてあたしに災いを振りまくようになった。それは対処しようと思えば何とか出来る範囲の物であったが、気分を害するには十分だった。だって、あたし以外の人には猫かぶったまんまみたいなんだもん。折角同士を募る

うと思ったのに、奴のフアンクラブに返り討ちに遭いかけたのは、
今となっては良い思い出である。

それでも我慢出来たのは、湖山とは違うクラスだったからだ。奴
との因縁は、委員会の時だけのはずだった。それなのに……。

——神様も酷いもんだ。何も、あんな奴と一緒にのクラスにする事無
いのに。

溜息をつきながら重い足取りで教室に向かって歩いていると、待
ち構えるかのごとく、そこには湖山が立っていた。

「よう。これからよろしくな。水鳥桃香サン」

——でた。お得意の嫌味つたらしい喋り方。

突然の襲来にあたしが何も言えず、その場に立ちつくしていると、
「あれ？ どうしました？ これから一緒にのクラスになるんですか
ら、仲良くしましょうよ」

そう言つて、わざとらしい笑みを見せ、ごく丁寧に手まで差し出して
きやがった。

「ええ、そうですね」

あたしも呼応するかのように営業スマイルを浮かべ、それだけ言
うと、あえて大周りをし、足早にその場を去った。

「……可愛くないヤツ」

後ろで何か呟かれたが、放っておく事にした。だって、どうせた
だの嫌見事だろうから。

出鼻をくじかれ、やつとの思いで教室に辿り着くと、

「あ、桃香ちゃんだ！ おはよう」

「水鳥、はよー」

温かい笑顔で迎えてくれる二人の姿があった。元のクラスで仲が良
かった、愛莉あいりと辰弥たつやである。そう、今回のクラス替えでは、彼らの
他にも仲の良い子と大勢、一緒にのクラスになる事が出来たのだ。何
も悪いことばかりじゃない。

「おっはよー！ 今年もよろしくね！」

いざとなれば奴の事は無視をしようと決意を固め、あたしは笑顔で教室に入った。

クラスメイトとの挨拶もそこそこに、がらりとわざと大きな音を立ててドアを開け、担任がやってきた。その音で皆、とりあえず席に着く。

「えー、私がこの度、三年三組の担任になった辻元だ。よろしく」新しい担任は、いかにも体育会系といった、赤ジャージの熱血教師だった。あたしは幸い、この人の授業を受けた事は無いが、男子によるととにかく暑苦しいんだとか。曰く、しょっちゅう南中している太陽を背に、“さあ、あの太陽に向かって走るぞ！”と言い、生徒に“先生、太陽がまぶしすぎて目がくらんで走れません！”とつつこまれる、一連のやり取りがあるんだとか。まあ、行事とかは盛り上がりそうだし、悪い先生ではないと思うのだが、しかし。

「さて、君達もとうとう中学三年生になった訳だが、三年生と云えば最高学年だ。君達は下級生の模範にならなくてはいけない。分かるな？ 君達も去年までは、上級生の後姿を見て学んできたようだがあの格好良い様を思い出して、先輩方の名に恥じないよう精進してほしいと思う。その為にはまず、態度から改めなければ」

うんぬんかんぬん。結局、他のクラスの先生がもうすぐ式が始まるからと呼びに来るまで、そのありがたーいお話は続いた。ありがた迷惑ここに極まれり、である。

その後、体育館では校長先生のこれまた長い話が続き、あたし達のクラスは皆、疲れ切っていた。

——なんで先生って皆、話好きなんだろう……。

幸い、年度初めという事もあり、表彰関係はなかったので、長い長い話の後に待ち構える物は無い、誰もがそう思った。ところが。

「えー、では三年生はこれから学年集会を行いますので、残って下さいー。一、二年生はすみやかに教室に戻るように」

声の主は、我が担任だった。正直、彼が悪魔に見える。あたしは彼の頭によきつと生える角を見た気さえた。

そんな訳で、へとへとになりながら教室に戻った。

「よし、皆帰ってきたなー。ってあれ？ 何でそんなにぐったりしてるんだ？」

——誰の所為だと思ってるんだ！

クラスの声も一つになった所で、ようやく自己紹介が始まった。あたしの番になった時、どこからか視線を感じたが、気にしない事にする。それも一段落すると、今度は係決めをする事になった。そこで、もしかしても最悪な事態が、あたしを待っていた。

「じゃあ、まず学級委員を決めるかー」

半ば定石通りに、担任は切り出した。おそらく、さつさと司会進行の座を明け渡したいのだろう。しかし、これもまあ通常運行だが、誰一人として自ら手を挙げるような事はしなかった。あたしも、去年でもうこりこりである。今年は絶対にやるもんか、と固く心に誓っていた。

一通り教室を見渡してから、彼は悪魔の言葉を口にする。

「誰もいないか。そんじゃ、誰か推薦したい奴はいるかー？」

出た。このいかにも代表者に選ばれるなんて、君はなんて友人達からの信頼が厚いんだろう！ と錯覚させる作戦。いやまあ、実際こうやって決めるのが一番早いし、選ばれた方も何となく乗り気になっではしまうのだが、しかしあたしはこのやり方が嫌いだった。それでも意見しないのは、他に言いやり方が思いつかなかったからである。どこかのクラスではくじ引きで決める等という、一件超公平な手段を取っている所もあるらしいのだが、あれはあれで問題がある。人には向き不向きがあるのだ。それを運だけで決めてしまうのは、いただけないと思う。

とまあ、こんな事を思っても口出ししないのは、つまるところ、下手に目立つととばかりを喰らうからであった。

「はい、湖山君が良いと思います」

そのうち、クラスメイトの誰かが、最初にこう言った。奴は去年

「昨年と二年続けてやっているの、名前が挙がるのは当然と言えば当然である。」

「湖山、どうする？」

「他にいなければ」

これで、男子は確定したも同然。

「じゃあ女子はー」

何となく嫌な予感がして、あたしはとっさに気配を消した。

「水寫で良いんじゃないか？ 去年もやってたコンビって事で」

しかし、それは的中する。他の皆も納得顔だ。

「ちょ、ちよつと待ってよ！ あたしは別にこいつと組んでた訳じゃ」

そんなあたしの声は、届くはずもなく。

「じゃあ、多数決を取ります。二人が学級委員になる事に賛成の人」
面倒な役職は、他薦でさっさと片付けるもの。三分の二程が手を挙げてしまい、気がつけばもう、全てが終わった後だった。

——そんなあー！

「ほい、じゃあうちのクラスの学級委員は、湖山と水寫って事で。あとよろしく」

パチパチパチ。ちらほらとあがる拍手の中を、仕方なくあたしは立ち上がった。

「よろしくね、水寫さん」

影でウインクまで決められたが、何も反応する事は出来なかった。その後、放心状態のあたしは虚ろな目で、次々と埋まっていく名前を黒板に書きなぐっていた。

てきぱきとした司会進行で、あたし達のクラスは早々に全ての役職が決まり、どのクラスよりも先にHRは終わった。湖山という男、あれで実はちゃっかり仕事は出来る奴なので、こういう時には心強いのだが。

複雑な気分を抱え、あたしは愛莉と共に家路に着いた。

「も、桃香ちゃん。そんなに落ち込まなくて……」
「うう」

肩をがっくりと落とし歩くあたしを見かねて、彼女はフォローを入れてくれる。

「私も何かあれば手伝うし、それにほら、湖山君だって良い人そうじゃ」

「それだけは、絶対に、ない！」

突然大声を上げ、高らかに宣言したので、愛莉はしばし啞然とする。

「桃香ちゃんってば、前から湖山君の事嫌いみたいだけど、一体何があつたの……？」

「色々ありすぎて……。でも、あいつが最低最悪の人間だって事は嫌って言うほど知ってるわ」

握りこぶしを固め、今にも何かに殴りかかりそうになつたので、すかさずなだめられた。

「もう、そんな物騒な事言わないの」

「はい」

同い年なのに、愛莉は大人っぽいというか、しっかりしているとつか。優しくてちょっと内気な所が可愛い、あたしの一番の親友である。

「それじゃあ、また明日ね」

楽しい時間はあっという間に過ぎるもので、気が付けばいつもの分かれ道まで来ていた。

「ばいばーい」

——はあ、でも本当、これからどうしよう……。

愛莉と別れ、一人悲しみに暮れながら歩いている時だった。

「危ない！」

突然大きな声がして振り返ると、車がものすごいスピードで此方に来るのが見えた。

——やばいつ！

とつさに避けようと思ったのだが、そこはガードレールもなければ近くに脇道もない住宅街。いつもは野良猫の通り道になっており、手を伸ばせば楽々届く塀も、この時ばかりは高い壁のようにそびえ立っていた。

鳴り響くクラクション、背中に当たったとてつもない衝撃。もう何が何だか、分からなくなっ

あたしの意識は、そこで途切れた。

きっかけは事故（後書き）

第一話からいきなり物騒な終わり方をしてしまいました。

この後はあらずじ通りに進みます。ので、次話以降の展開にご期待（？）ください。

探偵社へようこそ

事故の後、あたしはすぐに救急車で運ばれたらしい。あんまり大きな音だったから、近くに住んでた人達が驚いて飛び出してきてくれたんだとか。そういう点では、あそこが住宅街だった事に感謝しなくてはいけないかもしれない。あと少し離れていたら、そこには畑しかないような田舎だから。通報が遅れ、運ばれるのが五分でも遅かったら、危ない所だったようだし。

詳しい事はよく分からないんだけど、とりあえず治療を受け、間一髪、一命は取り留めた。が、事故の後遺症なのか、視力はほとんど残らなかった、らしい。両親はその事を酷く心配していたが、それがよく理解できなかった。何故なら、あたしにはしっかりと、彼らの姿が見えていたのだから……。

不幸中の幸いか。当たり所が良かったらしく打撲などの怪我も軽く、目以外は健康そのものだったので、一週間も経たないうちに、あたしは登校する事が出来た。最初、周りは頭に包帯を巻いているのを見てとても驚いていたが、あたしの様子が普段と変わらず元気そうなのを見て、それ以外の変化に気付く者は誰もいなかった。そう、彼らを除いては……。

その日の放課後、いつものように帰り支度をしていた時だった。

愛莉と辰弥が近づいてきて、

「ちよつと話があるんだけど、いい？」

と聞いてきた。どうせ、進路か恋愛か、そんなありきたりな事だろう。そう思ったあたしは快く、

「うん、いいよ」

二つ返事で、彼らについていった。

——なんだ、ここ？

荷物も持って、という事だったので、てっきりどこかその辺でた

むろするものだとはっかかり思っていたのに。連れてこられたのは、学校にほど近い、古いビルだった。壁にはひびが入り、窓にはガラスではなく段ボールがはられ、取り壊す寸前といった様をしている。まさか、この年になって隠れ家とか、秘密基地とか、そういうノリなんだろうか。

「ここだよ」

そう言うと、彼らは慣れた様子で扉へ吸い込まれていった。

「ちょ、ちょっと待ってよー！」

仕方なく、あたしも二人を追って中に入る。小走りになりながら、これって住居不法侵入とかにならないのかな、と頭の片隅で考えていた。

——うっ、なんか嫌な感じがする。

中は外見よりもまともで、多少埃っぽくはあったが、クモの巣などは張っていないかった。てつきり中も外觀そのまま、幽霊屋敷のようになっているものだばかり思っていたので、少しか拍子抜けする。だがしかし、まだ夕方だというのに電球が切れてるのか薄暗い廊下や、踏み出す度にぎしぎしという階段は、あたしの心を不安にさせるのに十分だった。それ以外にも何やら得体の知れない気配を感じながら、彼らが入っていったと思われる部屋のドアノブを回す。すると、まばゆい光と共に、パーンツ、という破裂音がした。

「桃香ちゃん、おめでとー」 今日から桃香ちゃんも、あたし達の仲間だよっ！」

「はい……？」

突然クラッカーを鳴らされ、愛莉に祝福され、もはや何が何だか分からなかった。状況を把握する為に、とりあえず室内を見渡す。そこにはお菓子の乗ったテーブル、古びたソファ、ファイルの入った棚などが置いてあり、校長室を思わせるような内装になっていた。それにここだけは掃除が行きとどいているらしく、電気もついている。入った時に目がくらんだのはその所為だ。どうやら、ここは彼らの根城なんだな、と直感的に思った。そこで余裕が出来たのだろ

うか。不意に、愛莉と辰弥以外に人がいる事に気付いた。なんと、あろう事か湖山もそこにいたのである。何故こいつが、と思いつつもとりあえずあたしは、ここで話の腰を折っては先に進まないと考え、最初の疑問を口にする。

「仲間って、何の事？」

「だーからー、この探偵事務所の」

そう説明したのは、またしても愛莉だった。彼女は誰にでも優しく、とっても良い子なのだが、いかんせん思い込みが激しい。この事も、すでに話した気でいたのだろう。それを見かねて、辰弥がフォローする。

「ここは、霊的な力を元に、犯人や失くし物を探す場所なんだよ」

「へ？」

まあ言われてみれば、やや高級そうなソファや机などは依頼人用なのかもしれないし、あのファイルの中には今まで解決した事件の概要なんか閉じられているのかもしれない。でも、何故“霊的な力を元に”なのか、そこがさっぱり分からなかった。彼らに幽霊が見えるなんて事は、聞いた事も無かったからである。

あたしが黙っているのを見て、納得したと捉えたのだろうか。

「つまり、お前は見えざるモノが見えるようになったんだ。俺達と同じように。まあ、今までのお前は全く力も無いし、そういうものを信じようとしなかっただろ？ でも、今は違う」

湖山がそう付け加え、そして最後に

「翼探偵事務所によっこそ！」

と両手を広げ友好的に、三人は言った。

「えっ……」

あたしは驚きを隠せずにいた。確かに、奴が言うように、今まで靈感もなく、お化けや幽霊の類も信じてはおらず、むしろそういう現象は全て、科学の力で証明できるという否定的な立場をとってきたのである。それなのに……。

こんなノリノリで言われても、正直、彼らがだましているのでは

ないか、という疑いの方が強かった。退院祝いのどつきりとか。でも、それにしてもメンバーがおかしい。だって、愛莉と辰弥だけならまだしも、そこにあるう事が湖山が混ざっているのだから。あたしの知る限りでは、彼らに接点はないはずだ。それに、奴は兎も角、二人はこんな手の込んだどつきりなんかしない。そうすると、やっぱり彼らの話は事実という事になるのだが……。どうにも腑に落ちなかった。

一度にたくさんの事が起こり、混乱する頭をどうにか落ち着かせ、その上でこの状況をひっかき回せる“何か”を探す。

「じゃ、じゃあ、あたしがそういうものを見ているっていう証拠でもあるの？」

——これならどうだ！

あたしは、やや自信ありげに質問してみた。流石の湖山達も、こんな質問をされたら困って考え込むだろう。なんてったって、あたしの見ているモノはあたしにしか見えないはずなのだから。そうしたら、隙をついてここから逃げ出せばいい。愛莉と辰弥には悪いが、あたしは一刻も早く、この場を立ち去りたかった。この部屋に入ってからというもの、嫌な予感がずっと付いて回っているのである。しかし、そんな即興の考えが通用するほど、湖山は易しい相手ではなかった。

「ああ、あるさ」

奴はあっさりと答えた。

「ここに俺達がいるって分かった時点で、お前の負けだ」

「どうしてそんな事が証拠になるのよ!？」

あたしは意味が分からなかった。

「あのね、桃香ちゃん目の目、もうほとんど見えないはずなの。だけど、桃香ちゃんにはすっかり周りが見えているわよね？ それはかなりの力が無いと、出来ない事なのよ」

愛莉が申し訳なさそうに言った。

「それに……気が付いてないのかもしれないが」

湖山が更に、追い打ちをかける。

「お前、今両目に包帯を巻かれているって、知っているか？」

反射的に、あたしは手を目に当ててみる。そこにはざらざらとした布の質感があった。

「う、嘘……」

「まあ、そういう事なんだ。……今まで、黙っていてごめんな」
今度は、辰弥が言った。

何故だろう。謝られる事ではないのだろうが、それでもやはり視力を失った、という事を改めて聞かされると、何とも言えない気持ちになる。それも、頭の中にははつきりと映像が浮かんでくるんだから、もはや訳が分からない。だがこれで、両親も先生もクラスメイトもあたしの事を変な目で見ていた理由に、説明はついた。いくらなんでも、これはおかしい。あたしが“普通”でなくなってしまうた事の説明として、これ以上有効な物は無かった。

彼らの言葉が頭の中でぐるぐると回り、あたしはしばらく立ち尽くしていた。

「とにかく、明日からは放課後、毎日ここに来るように。じゃあ、お前も疲れているだろうし、今日は解散」

湖山の一言で、あたしは我に返った。

「あの、あたし、ここに入るってまだ一言も言っていないけど？」

あたしに妙な力が宿った事は、もう認めざるを得ないだろう。だが、それとここに入るかどうかというのは別問題のはずだ。そこは自由があつていいはず。なんだその悪徳業者の勧誘システムみたいな手法。

そんなあたしの抗議の視線を物ともせず、奴はいけしゃあしゃあと言つてのける。

「何言つてんだ？」

湖山が続ける。

「お前が入る事は、前から決まってる」

預言者が貴様は、と言いたくなるのをぐつとこらえて、

「どうして？」

理由を問いかける。喧嘩している場合ではないが、追及の手を緩める気はさらさらなかった。

しかし意外にも、これに答えたのは湖山ではなく、辰弥だった。

「それだけ、桃香の力が強いってことなんだ」

あたしが内心激情しているのを知ってか知らずか、彼は代わりに説明する。

「俺と愛莉はただ見えるってだけだ。でも、桃香と優は見えるだけじゃなく、気配を追ったり感じたりする事もできる」

「それって、本当にすごい事なのよー」

「ま、そういうことだ」

湖山が締めた。奴と同じ、という所が氣にくわなかったが、まあ劣っているよりはましだとポジティブに考える事にする。

「ね、桃香ちゃん。あたしもいるんだし、一緒に頑張ろうよ！」

それに、愛莉にここまで言われては、断れない。腹をくくるしかなかった。

「分かったよ。入ればいいんでしょ、入れば」

上手く乗せられた、という感じは否めなかったが、この流れでは致し方ない。もしかしたら奴は、ここまで予想していたのかもしれないが、そればかりは確認する術も無かった。

「けど、どうしてあたし、今更になって見えるようになったの？」

だから代わりに、一番聞いておきたい事を尋ねてみた。生まれつき持っていたというならばまだ分かるのだが、生憎とあたしはそうではないようだし。

「それは多分、あの事故で視力を失ったからだ」

まるで予期していたみたいに、湖山が即答する。

「視力を失った分、不自由が無いよう、それに見合うだけの力を与えてくれた、と思えば分かりやすいだろう？」

———それですか……。

あたしはやっと、納得する事が出来た。いや、そういう気になった、という方が正確かもしれないが。

「まあ、あまり良くは無いけど、きっかけになったという事だね」
辰弥が補足する。

「きっかけ……」

あたしはそう、呟いた。

入団ですと

「とまあ、歓迎したいのはやまやまなのだが」

言質をとったからだろうか。急に真面目な、というか何か企むような表情をして、湖山が宣言した。

「君にも一応、テストを受けてもらうよ」

「て、テスト？」

てつきり、自分で言うのもなんだが、あたしは“スカウト”されているのだと思っていたから、寝耳に水だった。

「と言つても、簡単なものだよ」

そう言つて、奴が引き出しの中から取り出したのは、四本のシャープペンシル。どうやら全て、色が違うようだ。

「このピンク・オレンジ・緑・青の四本、事前に俺達で選んでるんだ」

「これをどれが誰の다가当ててほしいの」

「勿論、チャンスは一度きり」

この口ぶりからすると、ここまでが彼らの段取りらしい。またもやはめられた気分を、あたしは味わう。

「なんだつたら“力”を使つても良いぜ？ もつとも、お前の力がそういう風に使えるかどうかは、分からないけどな」

「……その言い方だと、まるで個人差があるみたいね」

「おつしやる通り。ま、その辺も追々、な」

……この調子じゃ、あたしがきちんと全部全て丸ごと知るのは、果たしていつになる事やら。

「質問は一回まで。ただし、それには三人とも答えよう。それで良いか？」

「ええ」

要するに、一本ダミーが入った中で、三本を正確に当てると言うだけの話だ。三本から四本というだけで確率は上がったものの、基

本やる事は変わらない。

こうなったら、この茶番に最後まで付き合ってやろう。道化役を決め込み、あたしは流儀に則った。

「皆の好きな色を教えてください？」

「この中にもいい色でもいいのか？」

その辺りは心得ているというか、抜け目がないというか。しかし、その程度の問に揺さぶられるような桃香さんでもないのであった。

「構わないわ。それと、真偽は問わない」

「つまり、嘘を言っても良い、と？」

「そういうこと」

微笑を交えて言ったあたしは、さもしてやったり、という顔をしていたのである。湖山が苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「私はピンクが好きだなー。淡い色って可愛いよね。あと、あったかいし」

あたしの問いかけに最初に素直に応じたのは、やはり愛莉である。

「俺は青だね。クールな感じで良いよ」

「僕は黒かな。全てを塗りつぶす漆黒。格好良いね」

それに続くように、辰弥、湖山。ちなみに、私は空色である。

「成程ね」

皆の答えは、あたしが予想していたものと同じだった。ならば、最初から分かっていたようなもの。確証はない。しかし、

「こんなの簡単よ」

自信はあった。湖山の事はともかく、愛莉と辰弥に関しては、よく知っているつもりだから。ま、そうはいったものの、内心では冷や冷やしていたんだけれども。いや、後からよく考えてみれば、あの時正解しなかった方が良かったのだろう。だって、これは“入団テスト”。受からなければ、あたしがこれからここで働く道理も、なかったはずなのだから。

「まず、湖山がピンク。これは決定事項」

「なんでだよ」

「だって、あんたが一番好きな色、なんでしょう？」

一瞬だったが、ぎくり、と目に見えて狼狽したのが分かった。

「馬鹿な、俺の公式ホームページではちゃんと“黒”だよ」

「いや、これあんたの熱烈なファンからの情報だから」

奴に何故か人気があり、ファンクラブまであるということはすでに前述したような気がするが、ホームページまで持っているとは知らなかった。しかも、あの口ぶりからするとどうやら自分で作ったらしい。ITボーイ気取りやがって。まあ、そこはとりあえず置いといて。何故かあたしの友人に奴のファンクラブのメンバー、しかも会長が存在し、何かにつけてはいろいろな情報を流してくるので、あたしも覚えてしまったのだ。

「あたしは別に全然、これぼっちもあんたの事になんて興味はないんだからね」

顔を赤らめてそっぽを向けばもう少し可愛げがあるように聞こえるのかもしれないが、生憎、あたしは奴の目を見ながら無表情で、これを言った。

「そ、そうなのか……」

これに湖山が微妙に凹んでいるような、そんな素振りを見せたのだが、気にしないことにしておく。どうせお得意の演技に決まっている。もう騙されるもんですか。

「……武士の情けで、お弁当袋の事に関してだけは、黙っておいてあげるわ」

「!？」

そこまで知っているのか、と奴の顔にさーっと青い筋が見えた事は言うまでもない。ふむ、どうやらあの一見無駄に思える雑談も、こうして脅し文句に使う分には十分に効力を発揮してくれるらしい。これは良い事を発見した。

「桃香ちゃん、なーに、それ？」

「聞かない方が良い事、というか聞くだけ無駄な情報の事よ」

誰が奴のお弁当袋は、薄桃色で愛らしいデディベアが印刷されて

いるものである、という情報を欲しがるといふだろうか。全く、そんな奴の気が知れないわ。

「で、俺達のは、どれだと思っただ？」

シヨックで立ち直れない様子の湖山を見かねてか、辰哉が助け舟を出す。

「で、そうなると愛莉は消去法でオレンジ。きっと“それだと意外性がない。男の俺がピンクを選ぶ事にかく乱の意味があるんだ”とかなんとかほざいて、湖山が先にとっちゃったんでしょ？」

「すごい。そこまで分かつちゃうもんだー」

目をキラキラと輝かせて感心する愛莉には悪いのだが、こんな事はその人の性格とか考えたら、誰にでも分かると思っただ……。

ここまでは納得してくれたらしい。辰弥はふむ、と小さく頷いてから言う。

「で、最後に俺が残るわけか」

「うん。そうだね。あたしも、ここが一番迷っただけど……」

こうであれば良いな、という願望にすぎないが、どうせここまできれば、当てずっぽうでも半分は正解するのだ。それなら、あたしの好きなようにさせてもらう。

「辰哉は緑、かな？」

そう言つて、あたしは綺麗な新緑のペンを辰哉の前に置く。これで手元に残ったのは、見る者を晴れやかな気持ちにさせるような、空色。

「なんでそう思っただ？」

「だってほら、辰哉、優しいじゃない？」

参ったな、とぼりぼりと頭をかく彼に、あたしは最大級の笑顔を見せた。

「辰哉ならきつと、あたしにこの色のペンを残してくれる、そう思っただよね」

「あはは。桃香、その色好きだもんね」

「やっぱり、覚えててくれたんだ。嬉しい」

あれはいつの誕生日だったか。確か偶然平日にあつたとかで、皆であたしの誕生日会をしてくれる事になったのだ。その際に、彼はわざわざあたしの好きな色をリサーチして、その色のノートプレゼントにくれた、という出来事があつたのである。

「ごほんごほん」

この話はもう終わりだ、と言いたいのか、ここで湖山が割って入る。その時、二人の視線がぶつかっていたような気がした。

「ま、結論から言えば、お前の推理は大当たりだ。元々、素質があるという事かもしれん」

「じゃあ……」

まあ、四本ペンがあつたら、そのうち一本はあたしのものだと思つて差し支えないだろう。おそらく、テストに合格したら仲間の証として受け取るはず。そう考えたからこそ、あの推理だったのだ。まさか他にもう一人既存のメンバーがいて、その人の分だという訳でもないだろうし。

そんなこんなで、

「合格だ」

無事、あたしの推理は当たっていたらしい。が。

「やったね、桃香ちゃん！」

「うん？」

この時ようやく、あたしは何かがおかしい事に気が付いた。

——あれ？　　そういえば、あたしなんでこのテスト受けてたんだっけ……？

「では、今日はこれにて解散。明日から放課後は毎日、事務所に集合するように！」

「って、しまったあああああああああああああ
ああああああああ」

思い出した頃には、時すでに遅し。今から考えれば、あたしのこ
ういう負けず嫌いな所も計算に入れた上で、奴はこの作戦を仕掛け

たのдарう。

やはり気の抜けない男だ、とこの時あたしは実感した。

まだまだ聞きたい事は大量にあったのだが、その日は大人しく帰宅した。一度落ち着いて頭の中を整理する必要があると思ったのだ。それに、もしかしたらあれは夢で、家に帰ればまた昨日と変わらない生活が待っているかも、そう願ったのである。

しかし現実には、そう甘いものではなく、自分の部屋で鏡を見た際に、それは再び実感としてあたしの中に入ってきた。

「本当、なんだ……」

そこに映ったあたしは、確かに包帯でぐるぐる巻きにされていた。
「はあ……」

しばしの間、溜息をつきながら自分とにらめっこする。

「うーん、でもまあ、なんとかなるっしょ」

いつまでも沈んでいるのは自分らしくない、と半ば強制的に気分を入れ替え、あたしは立ち上がる。この“不思議な力”とやらのおかげで生活に不自由していないのもまた、前向きに考えるのを助けてくれているのかもしれない。そうだ、これがなければあたしは闇闇と立ち向かわなければならなかったのだ。光の閉ざされた世界に置き去りにされる事を考えれば、こんな逆境、何とでもなかった。

——そういえば、“仕事”ってなんなんだろう……？

もしかしたら最も重要な事を尋ね損ねたかもしれない、と不安にはなったが、

「ま、行ってみれば分かるでしょう」

あえて楽観的に捉えて、その日は深い眠りに落ちた。

入団ですと（後書き）

さて、前置きはこれで終了。

次話はいよいよ、翼探偵事務所、始動です。

彼らがどんな風に事件に立ち向かっていくのか、またどんな事件が彼らを待ち受けているのか。

中学生に戻った気分で、書きすすめていきたいと思います。

おばあさんの時計

多少の不安を抱えたまま、翌日は先生の声が耳に残らないぐらいに、あつという間に過ぎていった。そして、とうとう放課後がやってきてしまったのである。

いや、まあでも昨日の今日でいきなり仕事とかないだろう。と思えるほど、あたしは樂觀主義者でもなく。同じクラスに愛莉と辰弥がいた事が決定的だった。彼らがいなければきっと、逃げ出すことも可能だったろうに。二人の笑顔に連れられて、しぶしぶあの廃ビルに一緒に向かうと、そこにはもう湖山がいた。

「遅い」

奴はあたし達を見るなり、不機嫌そうに言う。

「ああ、ごめん優。さ、さっさと仕事しようぜ！」

辰弥が三人を代表して、形だけの謝罪をする。なんだか、奴の扱いはもう心得ているようだった。

「そう、だな。新米探偵、水鷲のお手並み拝見といこうじゃないか」
よっぽど待たされたことが癪だったのか、いつもより更に意地悪そうな目であたしを見る。な、何よ、そっちが早く来すぎただけじゃない。感情的になりかけたものの、こらえる。昨日、挑発に乗って痛い目を見たばかりだったから、今日は慎重にならざるをえなかった。

相変わらずの調子の湖山は、そんなあたしの葛藤にも気付かずに続ける。

「さて、では「ちょ、ちょっと良いかな？」

しかし、それを遮る声があった。女の子特有の甘く、優しい声。

愛莉である。

「なんだ？」

奴が珍しく、驚いた風に尋ねる。それだけ、愛莉は普段大人しい良い子なのだ。

「ねえ、折角だから、ここでは下の名前で呼ぼうよ！」

につこり笑って、彼女は答えた。どうやら、奴があたしの事を“水鷲”と呼んだのがひっかかったらしい。もつとも、辰弥と愛莉の名を奴が呼んでいるところを見た事はなかったので、そこは何とも言えなかったが。というか、この三人が一体いつからつるんでるかすら、あたしは知らない。ほとんど何も、聞かされてはいないのだ。「いいんじゃない？ 俺は賛成。っていうか、もう呼んでるしな」

軽い感じで同意を示すのは辰弥である。まあ、彼は基本、誰の事も名前で呼ぶのは知っている。それが彼のポリシー、なんだとか。まあ、かくいうあたしも、二人の事は名前で呼んでいるので、問題はない。強いて言うなら湖山の事ぐらいだが、それはそもそも、奴の事を呼ばなければ済む話だ。実際、あたしは今までそうやって切り抜けてきた。

「ふむ。ま、まあ、いいか」

何故か若干頬を赤らめながら、湖山が咳払いをして話を戻す。

——なんだろう。もしかして、愛莉の笑顔にやられちゃったとか？ それだったら面白いのに。

「では、桃香。お前の初仕事はこれだ」

しかし奴は対して動揺した様子も見せず、あたしに封筒を差し出す。

「中を見てみる」

高圧的にうながされ渋々、中身を取り出す。

「時計……？」

中には、一目でそれと分かるような、高級そうな腕時計が入っていた。

「そうだ。その持ち主を探し出すのが、今日のお前の仕事だ」

「でも……どうやってやるの？」

そもそも、自分の力についてよく理解していないのに、いきなりやれと言われても。それに、あたしの力はたして、そういう事に使えるのだろうか？

しかし、湖山はそんな事は微塵も気にせずに、というかむしろ出来て当然、とばかりに、やる事だけを指示した。

「簡単だ。まず、時計を左手に乗せる。次に、右手を左手の上にかざす。とりあえず、ここまでやってみる」

まあ、根拠もなしに言うような奴ではない事だけは分かっているので、あたしは言われたように、時計を左手にそーっと乗せ、右手をその上にかざした。

「それから？」

「目を閉じて、心の中で持ち主は誰かを聞くんだ。それから先は、自然と見えてくる」

——本当かな……？

怪しさ満点の方法に、あたしは疑いながらも、仕方なく試してみる事にした。

——この時計の持ち主は誰？

すると、程なくして、ある一軒のお屋敷が見えてきた。そしてズームしていくように、そこに住んでいる人なのである、七十代ぐらいの女性が一人、大事そうにこの時計を眺めている姿が見えた。成程、この人が持ち主か。

目を開けるとすぐに、

「何が見えた？」

と辰弥が聞いてきた。

「……大きなお屋敷に住んでいるおばあさんが見えたわ。この時計を、とっても大切そうに扱っていた」

あたしは見たものをそのまま言う。すると湖山が、いつになく優しい口調で称賛した。

「初めてでそれだけでできれば上出来だ。後はその人を捜すだけだが……。それもやってみるか？」

「うん」

再び目を閉じ、一生懸命念じてみた。あたしの力だ。願えば必ず答えてくれるだろう、そんな気がしたから。今度はあえて何も聞か

ず、自分のやり方でやってみた。

——あの人は今、どこにいますか？

ぼやーっと、始めは色だけだった世界に、徐々に輪郭が宿る。木々の緑、色鮮やかな遊具。どうやら、公園のようだった。

——あれ？　これって、もしかして桜坂公園？

徐々に具現化されていく風景に、あたしは見覚えがあつた。そう、それはまさにあたしが事故にあつた場所だったのである。

「桜坂公園が見えた。多分、そこにいるって事だと思う」

「そこなら近いじゃん。じゃあ、皆で行こうぜ！」

あたしの言つた事を丸々信じているように、辰弥は明るい声で提案する。愛莉はうなづき、湖山はしんがりを務めるように黙ってついてきただけだった。

別段急いだわけでもないのに、事務所という名の廃ビルから公園までは、十分もかからなかった。まあ、通学路にあるぐらいだし、当然と言えば当然だろう。

「ここにその人がいるのね？」

到着するや否や、愛莉が確認するように言つた。

「うん。……あ、いた。あのベンチに座っている人だよ」

皆は一斉に、あたしの指差した方向を見る。そこには、悲しそうな表情をしたおばあさんが一人ぼつんと座っていた。上品そうな身なりといい、表情といい、まず間違いはない。

「よし、じゃあ俺が渡してくるよ」

四人の中で一番社交的な辰弥が、その役を買って出た。こういう時、彼の外見や雰囲気は効果抜群である。流石、伊達に生徒会役員ではない。

数分後、おばあさんと共に、辰弥が帰ってきた。

「ありがとうね」

おばあさんはとても嬉しそうに頭を下げた。見ているこつちまで元気になるような、そんな笑顔に、あたしはちよつと照れながらは

にかむ。そしてそのまま、やはり大事そうに時計を胸に抱えて、公園を後にした。

辰弥によると、あの時計はおばあさんのお孫さんから、誕生日にもらったものだったらしい。それを、この前すっかり落としてしまったのだという。

「なんか、女の子の叫び声に驚いたらいいんだよね。それで、おろおろしているうちに忘れちゃったんだってさ」

「それって……」

あたしの所為か、とも思ったが、口に出すのは止めておいた。言わなくても、彼らならそのぐらい察してくれるだろう。

「本当に、感謝してたよ」

辰弥は最後にそうしめくくった。

誰かの役に立てたという達成感が全身を包みこみ、帰りは行きよりも足取りが軽かった。

事務所に戻り、今日の反省会と称した雑談の最中、愛莉が言った。

「でも、さっすが桃香ちゃん。初めてでこんなに出来るんだもの。」

私と辰弥君なんか、まだそんなに出来ないのに。すごいねー」

まだ、という事は、二人にも素質はあるという事なのだろうか。

うーむ、やっぱりこの能力、奥が深そうだ。早いとこ聞き出さなければ……。

「そうだねー」

朗らかにいうのは辰弥である。一方、湖山と言えば、相変わらず仏頂面だった。それを見かねてか、

「優君もそう思うでしょ？」

彼女は意地悪っぽく尋ねる。

「まあな」

愛莉の問いかけに、湖山はそっけなく答えた。すると辰弥が「素直じゃないなあ。お前だって、初めての時は場所まで当てられ

なかつたくせに」

と、からかう。

「うるせー」

言葉は弱気だが、顔は耳まで真っ赤だった。ふむ、どうやらこの三人、かなり親しいらしい。割とのけ者にされてしまった感はあるが、それも仕方ないというものだ。それに……。気になる事が他にもあつて、それはどうでもいい事のように流してしまった。

「まあ、何はともあれ。桃香、よくやったな。今日はこれにて解散」
『お疲れ様でしたー』

声をそろえてしまうあたり、あたしもここに慣れてしまったなあと実感しつつ、愛莉と共に家路に着いた。

こうして、桃香の初仕事は、大成功で幕を閉じた。しかし、彼女の胸の中に残っていたのは仕事の事ではなく、湖山のあの照れた表情だった。

——あいつのあんな顔、初めて見たかも……。

常に人を見下したような眼と、皮肉で曲がった口元しか見ていなかったから、今日のあれはやけに新鮮だった。それだけ、奴が二人には心を許しているという事なのだろう。それを不覚にも羨ましいと思ってしまう自分がいたりして、いやまさかそんな、有り得ないと自分にしどろもどろになりながらも、一応つつこんでおいた。

その夜、あたしはなかなか寝付けなかった。

おばあさんの時計（後書き）

初事件という事で、少しほんわかするような、それでいて今までの状況を総括するような、そんな内容にしてみました。

ここからは学校生活を中心に、身近な事件をとりあげつつ、四人の関係なんぞ書いていけたら良いなあと思います。

期末でばとる（前書き）

少しタイミング外してしまいましたが、期末テストに関するお話です。

少し短めですし、幕間程度に楽しんでいただければ幸いです。

期末でばとる

「ふっふっふっふ……」

誰もいないはずの教室に、不敵な笑みがこだまする。

「ついに、ついに僕の季節がやってきた……！」

少年は笑う。普段は無感情で冷徹な美貌を、精一杯歪ませて。

「これまでとは違う。必ず、必ず、お前を負かして見せるぞ……」

強い意志を持って、確かな自信をその身に宿し。彼は高らかに、その名を口にする。

「水鳥桃香あ！」

一学期期末試験——それは、中学生にとっては乗り越えなければならぬ壁であり、同時に自分の能力を試す勝負の場でもある。そう、本来ならば試験というのは己との戦いなのである。相手は自身であり、それを打ち破ってこそ、明るい未来が開けるのだ。

ところが。世の中には、“好敵手”と勝手に自分の中で決めつけた相手に勝つ事だけを目標にしている輩がいる。彼らはふとしたきっかけ——例えば自分と同等で周りからはやしたてられてとか、はたまた格下でも一度屈辱的な敗北を受けたやら、あるいは格上相手への憧れ等——で、相手の事を認識する。その後はただひたすらに相手の事しか考えられなくなる。その感情の強さは恋にも似ているが、残念ながらそこは必ずしもイコールではない。それと同時に、相手が自分を意識しているかも知れぬ。片思いか、それとも両思いか。成程、その辺りもまさしく恋愛事のようなものである。

さて、前置きが長くなったが、今回の主人公であるところの少年——湖山優は悲しいかな、完全に片思いのケースである。確かに、桃香の方も優を敵対視してはいるのだが、それはあくまで委員会の時など、共に活動している時に限られる。成績に関しては、彼女の眼中に彼はいないのだ。何故なら。

「この連敗の歴史に、今回こそは一矢報いるのだ……！」

今まで行われたテスト中、優が勝った事は一度も無かったのだから。何故か常に王者に君臨する少女、それが桃香だったのである。まあ本人に言わせれば、勝負強いだけらしいが。ここぞという時に体調を崩したり、頭が真っ白になったりする事の多い作者にとつては、羨ましい限りの話である。とまあそれは置いて。

「くそつ、僕のどこがいけないんだ。容姿も完璧、人望に溢れスポーツ万能、何をやらせても人並み以上なこの万能人の何が悪い……！」

いや、そうやって自分の事を過剰に評価するのが悪いんじゃないっすかねつまりは正確に難ありだ！ とか言いそうになったその貴方。……ぴんぼんぴんぼーん、大正解。

自分では隠し通しているつもりのようだが、桃香と辰弥には勘付かれていますように、一部生徒と大多数の教師には、彼のこの天上天下唯我独尊の性格はばれなのである。つまり。彼は教師受けが非常に悪いのだった。まあ、流石にそれで評価が付くほど教師達もひいきはしないが、損をしているのは事実である。おかげで、教師と仲の良い愛莉などは、試験に出そうな所やポイントなんかをそれとなく教えられているというのに。そういう所も、優の可愛げのなさと言っても良いだろう。

しかし、本人としてはその事には気が付かない。よって、毎回良い所までは行くのだが、ひっかけ問題に狙い通り、ものの見事にひっかかるなど、惜しい所で得点を逃している。ちなみに、彼はケアレスミスをしない事でも有名であり、そこも可愛げがないとみなされている。

要するに、彼はなまじっか能力があるだけにつっこみづらいというある種一番面倒な、ナルシストなのだ。

「さて、嘆いていても仕方が無い……。行動に移らねば」

そんな彼なので、今までただ闇雲に戦っていたという訳ではない。得点上位者の勉強方法をリサーチし、自分なりに応用して利用する

など、そこそこ工夫をして勉強をしていた。しかしそれでも、何故か彼女には届かない。不動の女帝が桃香なら、万年二位の男、それが優である。

その為、今回も新しい作戦を考えて臨みたい所ではあるが、もうすでに策は尽きている。

「仕方ない……。また、奴に頼るか」

困った時の神頼み、とはよく言うが、見るからに信仰心の薄そうな男がすぎるのは、実在する人物である。

「ちよつと良いか？」

そんなこんなとある日の放課後。同じクラスになったのの良い事に、彼はある人物を呼び出した。

「またかよ……。もうネタないぞ」

適当な空き教室に連れ込まれた彼——辰弥の方も心得ているのか、温厚な彼にしては珍しく、明らかに迷惑そうな顔をしている。一応、テスト期間中は探偵社の活動を休止にしているので、彼女にばれる心配も無いのであった。

「そこをどうにかするのがお前の仕事だろう」

対する優は、すでに辰弥には自分の本性がばれているからか、普段とは違って横柄な態度を隠そうともせず命令する。

「しっかしなー。あ、そうだ」

「ん？」

「お前、仮にも所長なんだから、推理で問題当てちゃえばいいんじゃないの？」

「ほう」

——成程。それは盲点だった。何て事だ。俺は今まで、自分の能力を生かしきれてなかったのか……。

盲点を突かれ、黙りこむ優。その内面は新しい発見と、友人の慧眼への驚きと感謝で震えていた。

「意外と良い線まで行けるかもなー。まあヤマはるだけにしとけよ

？ お前頭良いんだから、普通に勉強した方がまだ……って聞いているのか？」

勿論、お察しの通り辰弥はこの話をさっさと切り上げる為に冗談で言っただけなのだが、追い込まれ藁にもすがる思いだった優は最後まで聞かずにその提案に飛びついてしまった。

「そうか、その手があったか……」

「……どーなっても知らないからな、俺」

こうなってはもうどうしようもない事を辰弥も知っているからか、こっそりひっそりと友人の身を案じるに止めた。一方の優はそんな事耳に入る訳が無いので、

「流石親友！ 僕達の絆は永遠だ！」

などと大真面目に手を握りながら言っていたりする。

流石にこれにはドン引きした辰弥は思わず、ぼそりと呟いた。どうして彼はその回転の良さを、真つ当な方向に使わないのか、という嘆きを込めて。

「大丈夫だろうか、こいつ」

翌日から、優の捜査は始まった。

まずは今更ながら、教師達との仲を深める事から始めた。優が質問に来るなど珍しい事だったので、一部教師からは何か企んでいるのではないかと疑われていたが、それでも大半の教師には素直に受け入れられた。

そうして、今まで掴みきれていなかった教師の性格と、ちらりと見せてもらった過去問、さらりと言われたヒント。出来得る限りありとあらゆる情報を入手し、そこから傾向と対策を練る。受験生も真つ青の手口である。

「ふふふふ。これで完璧……！」

こうして、寝る間も惜しんで確率計算等々にいそしんだ彼は、不敵かつ晴れ晴れとした表情でテストを受けたそう。

そして――

「わーすごいすごい」

全ての答案が返され、友人同士で一喜一憂する教室。掲示板というシステムは個人情報保護の観点で廃止されているが、それでもテストの結果は個人個人に、プリントアウトされ届けられるのである。そして、当然のごとく人気が集まるのは、成績上位の者である。

「また桃香が一位だな」

「へっへっへー」

「今度勉強教えてー」

「おっけー」

そんな賑やかな様子を影でうかがいながら、齒をギリギリと食いしばる男が一人。

「な、何故だ。何故なんだ……！」

やるだけの事はやった。全力は尽くした。それなのに……。紙に打ちだされた数字は『2』。優はこの時ばかりは、信じないと決めた神すら呪ったそうなの。

「く、くそう。今度は必ず……！」

彼の名は湖山優。打倒桃香に執念を燃やし続ける男。

入学当初から始まるこの見えない一人戦争は、またしても彼に黒星をつけたまま、続いていくのであった。

期末でばとる（後書き）

今回は文体も変えてありますし、何よりお笑い要素が強いですね。優には当初からその要員として働いてもらおうと思っていたので、個人的には満足です。

次話はちよつとまともに夏休みバージョンの捜査でもお楽しみいただけたらと思っています。

噂のゆづれいやしき（前書き）

夏と言えば怪談！

ってな訳で、街にはびこる奇妙な噂のお話です。

噂のゆうれいやしき

「ねえ、こんな噂、知ってる？」

その話を持ち出したのは、その手の話がどのくらい好きな愛莉であつた。

「噂？」

夏休みだというのに律儀に平日毎日活動をしている我が翼探偵社にて。しかし今日は取り立てる程の事件が無い、というかほぼ毎日事件は無いので時間を持て余しているあたし達にとって、雑談は業務の最も大きな部分を占めていた。

「そうなのー。あのね、近所の小学生から聞いた話なんだけどー」

そう言つて、彼女は嬉々としてその妙な噂を話し始めた。小学生から聞いた、という時点でもうちよい疑つてかかれよ、とは思つたが、まあ暇つぶしぐらいにはなるだろうとそのまま耳を傾ける。何も言わない所を見ると、どうやら他の二人も同意見、ないしは反論する気が無いのだろう。不毛な会話と斬つてしまえばそれだけだが、夏休みの宿題もとうに終えてしまった今、中身の無い会話でもある方がありがたい。

聞いた話をそのまま伝えているからだろう、あつちこつちに脱線してしたが、それでもなんとか彼女の話をまとめるところだ。その愛莉に話をしに来た小学生は、友達から幽霊屋敷の噂を聞いたらしい。そこで気になつて友人と一緒に町内を搜索してみると、偶然街のはずれにあるそれらしき建物を見つけてしまったのだとか。恐くて中には入れなかったらしいのだが、幽霊の影を見たという子もいて、それで愛莉に退治してほしいと依頼が来たようだ。

『……で』

粗方聞き終わりしばしの沈黙の後、辰弥と湖山が口をそろえて切り出した。

「ん？」

「それを僕らにどうしろ、と」

どうやら彼らは、愛莉の真意を測りかねているらしい。そんなどうしろも何も、彼女の性格を考えたら分かるはずなのに。

「解決、とまではいかないけど、調査する事は出来ると思うの」

待つてましたとばかりに、にこやかに笑う愛莉。確かに、彼女は自他共に認めるお人好しだし誰よりも優しいから、時折人の言う事を鵜呑みにして突っ走ってしまいう事もある。しかし、それでもこんな噂話を信じるほどに馬鹿では無い。それで子どもが怖い目にあつたというなら話は別だが、今回はそのような深刻な事態にも陥ってはいない。だから“調査”なのだ。

「何をだよ」

そついう事にはてんで鈍い男性陣が、順番に質問していく。

「まず、そんなお屋敷が本当にあるのかどうか。次に、本当に幽霊屋敷なのか」

「ある訳ないだろ、そんなの」

「だから調べるんじゃない」

この暑い中、腰が重くなっているのは知っている。だから彼女は最も効果的であろう台詞を、とびっきりの笑顔で披露する。

「どうせ皆、時間あるよね？」

『……』

これを言われてはぐうの音も出ない。何故ならそもそも、この話をしていた事自体、暇を持て余していた証拠である。

「でもまあ……」

「まあ、良いんじゃないの？」

流石にそろそろ話をまとめないと、ややこしい事になりそうだ。そう思ったあたしはようやく助け船を出す事にする。何故か愛莉が言い出さない、だが彼女が一番の心配事を切り札にして。

「噂が変に広まって、その家に入っちゃう子がいるかもしれないしね」

「あー……」

たかが子どもの噂話、とそこまで深く考えが及ばなかったのだろう。途端に辰弥の顔が気まずそうになった。同時に、愛莉の顔が少しほっとしたようになる。大方、自分の心配のし過ぎだと思って言い出せなかったのだろう。あたしも大して自信がある訳ではないが、可能性としてはありうるレベルだ。提示しておいても良いだろう。

ここで、しばらく聞き役に徹していた湖山が思考を終えたらしく、口を開いた。

「よし、じゃあ聞いてみるだけ聞いてみるか」

一応所長である奴の許可が下りた。ふう、これでもうひやひやしないで済む。

「そう言ってくれると思ったー。皆ー、もういいよ、入っておいで

ー」

『はい』

愛莉が珍しく外まで届くほどの大きな声を出すと、明るい元気な声と共にぞろぞろと数人の小学生が中に入ってきた。実は彼ら、先程からずっと影に隠れて待っていたのである。

「……桃香、お前知ってて黙ってたな」

「何がかな？」

とぼけても意味が無い事は分かっているが、ここははぐらかしておく。言った所で悪い方向にしか転がらず、それはただ無意味に騒ぎを大きくするだけだ。水を差すのは趣味ではない。

「さあ皆、このお兄さんとお姉さん達に、皆が見たって言う幽霊屋敷の事、もう一回教えてくれるかな？」

湖山があたしにからんでいるうちに、愛莉はてきばきと小学生を束ねた。この辺り、日ごろの面倒見の良さがうかがえる。

愛莉の話はともかく、当事者の話は変にまとめると話がずれてしまふ事がある。そこで、彼らの言葉はそのまま聞き入れる事にする。曰く。

「ぼろきれに包んであるのー」

「うついている影が見えたの！ あれはゆうれいだよきつと！」

「宇宙人がくつついてた！」

「色んな線が引いてあったよー」

他にもがやがや色々言っていたが、おそらく重要なのはこのくらいだろう。

「あとはお姉さん達に任せてね。絶対、幽霊退治してあげるから」

どうにかこうにか興奮する子ども達をなだめ、嵐が去った事務所にて。子ども達の証言を聞き、これまでずっと考えていたらしいにもかかわらず、

「……なんのこっちゃ」

三人とも訳が分からないという表情をしているのが、逆に不思議だった。

「え、分からないの？」

童心にかえって、と言ってもほんの数年ばかりだが、考えてみればすぐに思い当たるはずなのに。

『え』

むしろなんでお前は見当が付いているんだ、とでも言いたげな顔をしている彼らに、あたしは言った。

「兎に角、現場に急行してみよう。百聞は一見にしかず、って言うでしょ？」

確証は無かったし、流石にここからでは見えない。照りつける日差しは強敵だが、夏を感じておくのもまた一興だろう。ちゃちゃっと荷物をまとめて、あたし達は街へと繰り出した。

なんだか探偵役が板についてきてしまったなあ、と反省しつつ。

子ども達に教えてもらった地図と説明を頼りに探す事、三十分。目的の建物は彼らの言う通り、街の少し外れに位置していた。

「ここね」

『……え』

その屋敷を見た途端、あたしは自分の推理が合っていた事を確信し、他の三人は何が何だか分からないといった表情で固まっていた。

「ただ工事してるだけじゃない……」

「宇宙人とか幽霊とか、一体何だったんだ？」

そう、そこはただ工事をしているだけの一軒家。ただし、周囲を囲っている石塀や門が若干古ぼけており、屋敷と言っても良いほどの広さを兼ね備えている事から、子どもにとってそのように見えてしまった要素は十分持っていた事になる。

「見たら分かるじゃない」

来るまでは推測の域を出なかったが、実際に見てみれば分かる。

成程、彼らの言う事ももっともだ。しかもよく観察している。子どもともあなどつてはいけないのだ。

『どこが！？』

「想像力が足りないなあ。いい？ 頭を小学生の時に戻すのよ？」

それぞればらばらにうなづいたのを見て、あたしは謎解きを開始した。

「さて。まずは“ぼろきれに包まれている”。これは普通に分かるわよね？」

首を傾げる二人、そっぽを向く一人。

「……今はピンと張られているあのシート、あれがもし、一カ所でも外れていたとしたら」

「ひらひら揺れて、ぼろきれに見える、と」

「正解」

ああー、と納得する愛莉と辰弥。この二人の想像力が心配だ……。ともあれ、ここでいつまでも立ち止まっただけは迷惑なので、影に隠れていたインターホンを鳴らし、形だけは整えてから中に入る。あたしからは見えているが、他のみんなの視力では多分、近づかないとあれは見えない。

敷地内に入るだけならまだしも、流石に人の家に無断で近付き過ぎるのはどうかと思ったので、ぎりぎり見えるぐらいの位置で止まり、指を差した。

「“宇宙人”はおそらく、あれ」

「壁になんか張り付いてる!？」

まだ工事が終わっていないらしい一角に、それは存在した。全長二十センチメートル程の、ロケットのような形をした容器が、辰弥の言う通り壁に設置されている。もっとも、吸盤等で張り付いている訳では勿論無く、ただテープで貼り付けられているだけだったが。「ああやって、植物に栄養剤入れるみたいに、壁のひび割れに詰めてるのよ」

あたしも、家の近くでマンションの改修工事をやっていたからこそ知っていた事だ。これは見覚えがなくて当然だろう。しかし、工事をしているという時点で思いついてほしかった物だ。見た事も無い機械は、彼らにとつては未知の生物のように見える、と。

そしてその器具の周りには、色とりどりの線が引かれていた。赤、黄色、青、緑。それらはある規則性を持って、ペンキもはがれてしまった壁に模様を描いていた。

「で、この線は儀式用……ではないだろうな」

「うーん、ひび割れに沿って書いてあるから、何かの位置を示しているのかな？」

「そうそう。青がひび割れ、黄色が深くて埋めなきゃいけないひび割れ、赤が欠けているところ、っていう風に色分けされているみたいね」

これも現場の知恵である。なんでも、工事を始める前に全体を点検し、修繕箇所を見極めてから作業に入るんだとか。

「なんだ」

不可思議な線が実用的な物だと知り、ちょっとがっかりしたように溜息をつく愛莉と辰弥。

——なんだ、そんなに心霊現象が良かったのか!? それとも悪魔召喚の儀式でもやりたかったのか!?

「でもまあ、そうなら僕達に対処する事は出来ないんだ。これで良かったんだろう」

幽霊の正体見たり、枯れ尾花。解明されてしまえば何でもない、
というように余裕を取り戻した湖山がまじめに入る。

『でもーさー』

尚も食い下がる二人。まあ最期に確かに一つ、大元が残っている。
この屋敷が何と呼ばれていたかにも関わる、重要な目撃証言の検証
が。

「幽霊って？」

「まだ見てないよね？」

——だからそんなに目を輝かせて言うな！ これだから心が痛むん
だよ……。

キラキラとした純粋な瞳に見つめられながら、心の中だけでつつこ
みをする。それでもそこに謎がある限り、事実を明らかにするのが
探偵の仕事である。

…… UFOを検証する科学者ってこんな気持ちなのかな、と思
いつつ。

「それは多分」

「わしの事じゃよ」

『うわあああああああああ！』

突然の登場には、流石の湖山も驚いていた。その後、冷たい視線
が送られたが無視する事にする。というか、あたしの立ち回りが科
学者から心霊番組の司会者、あるいはネタの前振り係にシフトチェ
ンジした気がするが、そこは触れてはいけない所であろう。

「ここに住まわれている方ですね？」

皆呆然としてしまつて使い物にならないので、あたしが代表して
質問する。

「いかにも。なんだ嬢ちゃん。驚かないのかな。可愛げがないのう」
「生憎、慣れてますから」

この無駄に広くなつてしまった視界の所為で、どこにしようが隠
れていようが、一定距離ならばあたしの目は全てを見通す。慣れる
まではあちこちにぶつかつたり、不便な事も多かったが、仕組みを

「人が住んでいたんですね……」

「それで工事を」

門や塀を見れば、この家がどんなに歴史を経ているのか分かる。

「でも、なんであんな奇妙な噂が？」

「決まってるじゃない。おじいさんが流したのよ」

ええ！？
㊦

「お前さんにはなんでもお見通しじやのう。そうじゃ、わしが言い

「でもなんで？」

「そーいうこと。やっと頭が回るようになったわね、湖山」

「工事中の建物ほど、子どもの遊び場になりやすい物もないしの。」

ましてやここじゃ、広すぎて入り込まれても気付けないかもしれん。そうなった時、安全は保障できないからの。だから、入らないよう噂を流したのじゃよ。なるべく徘徊もするようにしての」

「そうだったんですか……」

幽霊の影は、家の中から見回っていただけ。二階などから見れば、シート越しなので宙に浮いているようにも見えたのだろ。何度も目撃されているようだから、よっぽど目を光らせていたようだ。

しかしそれだけ気を回しても、上手くいかないのが噂という人々の大好物の難しい所だ。それを指摘したくて来たようなもので、あたしは思い切って切り出す。

「でも、噂が広まり過ぎています。このままでは」

「面白半分の子が来るって言うんじゃろう？ それなら大丈夫じゃ」
まるであたしの考えはお見通しだ、と言わんばかりに、堂々と胸を張って彼は言った。

「工事は今週いっぱいで終わり。来週からはピカピカの家になっているからの」

華麗にウイंकを決められ、あたしは大人しく肩をすくめるしかなかった。

——どうりで、あの一角以外綺麗なはずよね。

ふわりと舞い上がったシートの隙間から覗く白い壁が、やたらとまぶしく映った。

工事が終わったら遊びに行く約束し、元気でパワフルでハートフルなおじいさんに見送られ、すぐごと踵を返した帰り道。

「……あのおじいさんの方が、一枚上手だったな」

さっきの仕返しだというように、湖山がにやりと告げる。

「そうだねー」

対してあたしは、はなから相手などしていない風を装い、さらりと受け流す。元々、年長者に勝つてやろうと思うほどの野心など、持ち合わせていないのだ。

「まあこんな終わり方もありだよな」

「だね」

しみじみとかみしめるように、一歩一歩踏みしめる。そう、今日は八月三十一日。明日からは新学期が始まる。

「よし、じゃあ花火でも買って帰るか！ 皆でやろうぜ」

「いいね」

「でも、どこで？」

『……』

こうして、あたし達らしくぐだぐだな感じで、中学生最後の夏休みは幕を閉じた。

噂のゆうれいやしき（後書き）

中学生にしては可愛げがないかもしれませんが、探偵としては謎があつたら解いちやうんですよね。性です、性（笑）

あと、今回ちょっとだけ、桃香の能力についても書かせていただきました。

他の三人の力もこれから明らかにしていく事にしましょう。

きょうか合宿（前書き）

夏休み中に書けば良かったのですが。

夏休みの事を全然描いていなかったなあという事で、回想的に入れています。

きょうか合宿

「えー、ではここの問題を……湖山」

「はい」

カリカリカリ。チョークが黒板を叩く音がメトロノームのように機械的で、単調なリズムが更なる眠気を誘ううらかな午後。長いようで短かった、楽しいようで退屈だった夏休みも終わり、新学期に突入した。しかし、来月に文化祭を控えた今、学業に身が入る訳も無く。準備に追われる日々の唯一の休憩時間と化してしまった授業中、あたしはぼーっとしながら考えていた。

夏休みに行った、強化合宿の事を。

*

あたしがそれについて初めて聞いたのは、まだ夏休みに入る前の事だった。

「今年も、あれの季節が近づいてきた」

放課後、いつものように事務所に集まったあたし達を前に、所長椅子にふんぞり返り、無駄に重々しく湖山が言った。

「そうだねー。今年は桃香ちゃんもいるしね！」

しかし、このもったいぶった言い方に慣れてしまったあたし達は、普段と変わらぬテンションで話を進める。その度に心なしか奴の肩が下がっている気がするのだが、気になど留めてやるものか。

「“あれ”って何よ？」

「夏合宿の事だ」

「と言っても、一昨年からだから、今年で三回目なんだけどね」

「へえ」

まさかここが他の部活動のように、まともに機能しているとは思わなかったので素直に驚いた。

——なんだ、意外と普通の事もしているんじゃないか。

しかし、そう思ったのもつかの間。

「三泊四日で優の別荘に泊まるのだ」

「別荘!？」

聞き慣れぬ単語に、あたしは目をひんむいた。

「知らなかったの？ 優君の家、すっごいお金持ちなんだよ?」

「そ、そう、なのか……」

湖山の嫌味要素が更に増えたな、と即座に感じた。

「すっげーよなあ。しかもでっけーんだよ。広いし。執事さんとかも当り前のようにいるんだぜー」

子どものように無邪気にはしゃぐのは辰弥である。まあ確かに、テレビなどでは目にする機会もあるが、なかなか自分の身の回りでは見る事は無いだろうし、ましてや行く事は更に限られるだろうから、興奮するのも分かる気がする。

「たかが別荘の一つや二つで、そう騒がないでくれたまえ」

『勝者の余裕!？』

だが、だからと言ってこいつが再び咲いたように生き活きとする事には納得がいかなかった。うん、なんとなくだが、こいつの性根がひんまがっている理由を悟った気がする。いや、それはお金持ちに対する偏見でしかないのかもしれないけれど。

そんなこんなで八月中旬。夏の盛りに、あたし達翼探偵社の面々は、迎えの車に誘われるまま、某避暑地に集結していた。

「涼しい……何故だ……」

「これが金持ちの力なのか……!」

着いてすぐ、車を降りた直後の感想がこんな感じだったのは、暑さの所為だという事においてほしい。もしくは夏休みボケしていると思われても良い。

「二人とも落ち着いて。避暑地だからだよ」

愛莉につっこまれる日が来るとは思いもよらなかったなあ、など

としじみ思いつつ、あたしは周辺の観察に戻る。

普段はやかましく聞こえる蝉の声すら、心なしか癒しの音楽になっている。陽の光に照らされて緑は輝き、青い空と白い雲のコントラストが美しい。奴の別荘は、そんな自然あふれる素敵な場所のど真ん中に存在した。こんな有名な所の一等地に別荘を構えられるなんて……。一体奴の実家は何をやっているのだろ。しかし聞いてみたくても、

「そうだ。前にも言ったが、別荘があるぐらいでそんなに驚くんじやない」

『驚くわ!』

というような掛け合いで誤魔化されてしまうので、なかなか機会が巡ってこないのであつた。

「でも辰弥君は二回目でしょう？ 慣れなきゃー」

「むしろ順応している愛莉の方が怖いわ!」

確かに、先程から騒いでいるのはあたしと辰弥だけで、愛莉は落ち着いている。湖山が堂々としているのはいつもの事だし、自分の家の物なのだから当然だ。だからおかしいと言えはおかしいのだが、いちいち騒ぎ立てるあたし達の方がガキなのかもしれない。

「まあ遊びに来ている訳ではないんだ。少し気を引き締めたらどうだ？」

「と、言われまして」

「合宿って雰囲気じゃないでしょう、この建物」

「……だな」

お寺風の日本家屋ならまだしも、あたし達の目の前にでんと存在するのは、どこからどう見てもまごうことなき洋館である。古びた門扉は汚れ一つなく、ただ歴史を感じさせる。ちらりと見える庭も手入れが行きとどいているようだ。アサガオのツタはアーチを作り、庭園には向日葵が咲き乱れている。

また、ここまで電車を乗り継いだ訳でもなく、普通に当り前のように、湖山家のスポーツカーが事務所まで迎えに来てくれてや

つてきたのだ。その際、どうしてスポーツカーなんだ、ワゴン車で良いわワゴン車で、という我々の意見に対し、なんだリムジンの方が良かったのかというセレブつつこみが入り、あれって実在するのかよ！という庶民の嘆きがあったという事実は伏せておく。

——これじゃどこからどう見ても、遊びに来た仲良しグループね。

そんな言い訳めいた事を頭の片隅で考えつつ、しばし屋敷の美しさに見蕩れていたものの、いつまでもここに突っ立っていては熱中症になってしまう。

「さー、入ろう入ろう」

何故か湖山ではなく愛莉に促され、あたし達は中に入る事にした。奴は、おいしいとは持っていくが、仕切りたがりはないのだ。

「その辺り、自分なりのバランスがあるらしいのだが、よく分かんない、はい、あいりせんせー」

そんな緩いテンションで、あたし達の夏合宿は始まったのであった。

さて。合宿と言っても、あたし達の活動内容はあくまでも探偵業務である。よって、今回もそのような事をするのかと思いきや、その実情は自分達の能力の把握、及び応用、更には相性等を見る事であつた。特に、メインはあたしの能力の把握とその使い方に関してである。今まではただ何となく、言われるがままに力を使つてきたので、皆の能力についてよく知らなかつたし、自分の能力についても全て把握できてゐる訳では無かつた。それでは危なかつと、ようやく湖山が重い腰を上げたという事だ。全く、最初からそうしてくれれば良いものを。しかし辰弥曰く、習うより慣れるだそうなので、最初は放置してゐたようだ。

という事で二日目までは、能力のテストが主だった。カード当て透視、物に残された念を読みとる等、あたしにとつては日常生活で普通にやっている事と、普段探偵社でやっている事が中心である。途中で飽きそうになりながら、二十種類のテストを無事にこなした。

そして。

「ふむ……。総合的にはやはり桃香がトップか」

全てのテストが終了し、一応成績をつける事になった。その結果、ほとんどあたしは一位か二位につけ、総合優勝を果たしてしまったのである。

「桃香ちゃんすごいねー」

「んー」

そう言われても、あたしの気持ちは複雑だった。だって、あの事故が無ければ、視力が失われなければ、こんな力を持つ事も無かったのだから。確かに、あたしの目は以前よりもあらゆる物を見通す。しかし、それは本当の色ではないのだ。昔、自分の目で見ていたあの色ではないのだ……。

「でも、愛莉や辰弥の力の方が面白かったよ。まさかそんな力もあるなんてね」

自分の事をあれこれ言われるのが嫌だったのと、純粹に皆の力は面白いと思ったので、二人に振ってみた。

『あはははは』

すると返ってきたのは、乾いた笑い。どうやら皆も、自分の力についてはあまり良い風に捉えていないみたいだ。その事に少しでも安堵するが、しかしなるとなく気まずい空気が流れてしまう。

その重苦しくなってしまう雰囲気を払拭するかのようには、愛莉が切り出した。

「と、ところでさ。今年の文化祭、どうしようか？」

我がクラスでは、喫茶店をやる事になっている。が、別にメイドカフェを目指すという訳ではない。そういう物は事前に実行委員会から止められている。まあ、例の台詞を言わない限りは、フリフリのエプロンをしているぐらいならきつと咎められないと思うが。中学校の文化祭なので、その辺りは厳しいらしいのだ。

とまあ、そういう訳で、一つ心配事があったのだ。それは。
「なんか、インパクトに欠けるよね」

同意を示す。

「そんな事ないよう！」

照れて赤くなる彼女。……どうして、こういう行動が自分の可愛さを証明していると気が付かないのか。

「いやいやいや。眼鏡を取ると誰でも美人と言いが、愛莉さんののはそれを超越するのですよ」

「そついや、眼鏡取ったとこ見た事無いなあ」

「気になる所ではあるな」

「ね？」

じつ、と三人の視線が愛莉に集中する。その後、呼吸を合わせたかのように、じりじりと少しずつ、あたし達は彼女に近づいていく。
「え、え！？」

三方向から徐々に壁際へと、追い詰められていくにつれ、赤い顔が青くなっていく。先程の失敗で若干おかしくなっているあたしは、更に壊れながら彼女に迫る。

「ふっふっふ、良いではないか良いではないか」

「きゃああああ、お助けええええええええ」

「桃香落ち着け！ キャラが崩壊してるぞ！」

「それはこういうシチュエーションで使う言葉では無かったと思う」
これには一緒になって遊んでいた彼らも、流石につっこんだ。

——少しやり過ぎたかな……。

怯えきっている愛莉を前に、この話題はこれで終わりにしようと思つた。しかし、

「じゃ、じゃあお料理で勝負だよ！」

根が真面目な良い子の愛莉は、あたしからの挑戦状を真に受けたようだ。

『何故そつなる！？』

「だ、だって、ほら、お料理が上手な方が調理に回った方が良いでしょう？」

しかも、一応まともな理由付きである。

「ふむ、一理あるな」

「じゃあ、桃香と愛莉で対決だ。審判は俺と優って事で」

これ以上おかしい方向に進むのを阻止する為か、二人もノリノリだ。

「仕方ないな」

発端は他でもないあたしであるし、受けて立つしか選択肢は無い。だが、まさかの料理対決ときたものだ。となれば、重要なのは。

「テーマはどうする？」

「喫茶店のメニューにあるもので良いんじゃないか？」

「元々、文化祭の目玉を考えようという話題から始まったんだしな」
そんな訳で、急遽、あたしと愛莉の真剣勝負と相成った。

「つて、なんでこんなに本格的なの!？」

準備が終わりました、と執事さんに呼ばれて出向いてみれば、キッチンには様々な食材が並んでいた。中には見た事も無いような野菜や魚まで存在する。突然決まったにしては、一時間でよくこれだけの材料を揃えられたものだ。いや、むしろこれが湖山家別荘では当たり前のように冷蔵庫の中に常備されているのかもしれない。

「まあやるなら徹底的にな」

『そんなに凝ったものを作る訳じゃないんだけどな……』

「まあ、いいじゃないか」

「制限時間は三十分。それだけあれば、二人とも充分だろ？」

「まあ、なんとか」

「なるだろうね」

メニューさえ決まっただけで、これだけ材料があれば問題は無いだろう。あたし達はそれぞれのコンロの前に陣取り、配置に着いた。どうでもいいが、何故こんなにおあつらえ向きに背中合わせになるようにコンロが二つ存在するのか。キッチンの異常な広さと良い、お互い何を作っているか分からなくさせるように台でセパレートされていたり、おあつらえすぎるにも程がある。

とは言え、そんなに時間がある訳でもない。メニューと手順を頭に思い浮かべ、臨戦態勢をとる。

「ではこれより、桃香vs愛莉による、料理対決、始め！」

三十分後。別室で待機させておいた二人の所に、完成した料理を持ってあたし達は集合した。調理の過程はあえて語らない。それはお客様は神様であり、あたし達の不手際を見せたくないからという精神だと思っていただきたい。だから、持てる技を尽くして戦った、とだけ言っておこう。

「では、只今より、審査を開始する」

「まずは愛莉からだよ」

「は、はい！」

何故かとても緊張した様子で、彼女は盆を机の上に置く。そして、
「特製オムライスです」

蓋を開けると、そこには一目で美味しそうだと分かるオムライスが乗っていた。

「け、ケチャップで文字まで書いてあるだと……！？」

「流石愛莉。メイドカフェがなんなのかを心得ているな！」

いや、だからそれを目指しちゃダメなんだってば、と全力でつつこみたかったのだが、流れを悪くするのもどうかと思ったので、心の中だけにしておいた。

続いて、試食。スプーンで一すくい、熱々のまま口に頬張る。

『美味い！』

「なんなんだこの卵のとろふわ加減……」

「絶妙だな。中のチキンライスも、固まる事無く口の中でほろほろと解けていく。中学生が作ったとはとても思えない」

あまりのおいしさに、その後は目的を忘れ、一心不乱に黙々と食べ進める二人。

「こりゃ、愛莉の勝ちは決定だな」

ぺろりと平らげ、あたしのいる前でそんな言葉まで口にする。確

かに、一口いただいたのだがそう言いたくなるくらい美味しかった。洋食屋さんも顔負けの味である。しかし。

「ふっふっふ……。それはあたしの料理を食べてから言ってもらおうじゃないの！」

不思議と、絶対の自信があった。オムライスの乗っていた皿を横に避け、あたしは自分の作品を机の中央に置く。

「こ、こりは……！？」

『ナポリタン！』

「そう。喫茶店の定番中の定番！ 昔懐かしナポリタン、召し上げれ！」

シンプルイズベスト。あたしの得意中の得意料理でもあった。

「ああ……」

「そうだな、喫茶店とは人々が心安らげる為に来る場所。ほっこり元気になる味だ」

すかさず、執事さんが珈琲を差しだす。ぷはあ、と和んだ所で、本題に入る。

「という事は……」

『勝者、桃香！』

「よっしゃー！」

勝利のガッツポーズは、天まで届くようだった。

途中から何故か料理対決になっていたが、一応皆の能力を把握し、翼探偵社は本格的に指導することとなった。

「さーで、これで事務所も文化祭も大丈夫そうだね」
「だな」

明るく笑うあたし達の横で、暗い顔で愛莉がぼそりと呟いた事など、ましてやその意味するところなど、その時のあたし達は知らなかった。

「……私が看板娘なんて……。向く訳がないのに」

こうして、三泊四日の夏合宿はあっという間に過ぎたのであった。

＊

「桃香ちゃん、桃香ちゃん」

はっと気が付くと、あたしの机の横に愛莉が立っていた。

「もう授業終わったよ？」

「あ、ああ。ごめん、ちょっと考え事してた」

「そう？　なら良いんだけど。皆始めてるから、早く行こっ」

「うんっ！」

あたし達の本番はここから。放課後、どのクラスも我先にと場所を確保し、作業にいそしむ。我がクラスも、メニューも決まり、衣装も作り終え、ラストスパートをかけている所だ。着々と進んでいく準備に、雰囲気も徐々に盛り上がっていく。

あと少しで、文化祭。

きょうか合宿（後書き）

……なんか皆暴走したのは暑さの所為だと思います、はい。
次話は文化祭です。果たしてどうなる事やら。
そろそろ物語も加速したいところですね。

お宝はんと（前書き）

初の割り込み投稿となつてしまいましたが。
いよいよ、優の能力が明かされる事となります。

お宝はんと

桃香が我が探偵社に入団してからというもの、皆桃香の能力に夢中になっていた。無理も無い。それだけ彼女の力は特別な物だ。この僕ですら、今まで見た事も無いぐらい珍しく、貴重な能力だという事は確かである。

しかし、僕という存在を忘れてもらっては困る。僕的能力だって、相当に強く、そして彼女のそれがある一点では確実に凌駕するものだ。

そう、僕こそは湖山優。我がクラスの学級委員にして、同時に学級委員長でもあり、眉目秀麗スポーツ万能、神が羨む程の能力に満ち溢れた将来有望の才能の塊。そして何より、翼探偵社の所長、なのだから。

*

二学期に入り、最初の行事は全校遠足だった。あたし達三年生はその前に修学旅行があるのでこれが最初の行事という訳ではないのだが、一・二年生にとっては間違いなく、待ちに待った初めての行事である。したがって、何故か異常な盛り上がりを見せるのも、この遠足の特徴だった。まあ、これを皮切りに怒涛の行事ラッシュが始まるので、盛り上がらざるを得ないといった所か。

その為、あたし達の気合いのボルテージは最高潮。生憎の雨模様にも削がれる事は無く、むしろ雲を蹴散らさんばかりの勢いで、クラスごとに分かれて現地に赴いた。

我がクラスはとある公園であつたが、着いた途端に実行委員がお立ち台と拡声器をおもむろに取り出した段階で、我々は軍隊よろしく整列した。

「おい野郎共！　これがおそらく、人生で最後の遠足だ！　用意は

「良いか！」

『おー』

「声が小さい！」

『おおー！』

「よし、大分声が出てきたな。では本日のミッションの説明をする。耳の穴かつぽじってよく聞けよ！」

……うん、どうしてうちのクラスの人は皆、こんなノリなのだろうか。そこは謎であるが、嘆いていても仕方がない。楽しいのは楽しいので、今日ぐらいはこのテンションに乗っかって行く事にする。ちなみに、ミッションとはレクリエーションの事。遠足とはいえ、そこは学校行事。何かしら、体を使って遊ぶ事を強要されているのである。だから自然と、行き先が公園や広場のある施設に限られてくるという理由でもあった。

「ルールは簡単だ。俺が事前にこのフィールドにいくつかのぬいぐるみを仕掛けておいた。その大きさによって、点数が変わる。サッカーボールサイズが五点、バレーボールサイズが十点、ピンポンボールサイズが百点だ！」

「ねえ、それってボールを隠せば良かったんじゃない？」

「わざわざぬいぐるみにする必要性は皆無……。謎だな」

「っていうか、百点見つけた時点で勝ちだろこれ」

「それよかピンポンボールで。ピンポン玉って言えば良いのに」

彼の説明に、様々なひそひそ声が飛び交う。ふむ、確かに普通に考えて、点差があり過ぎる。皆が察しているように、この勝負、勝利の鍵は百点であるように見える。ただ一つ、彼が類稀なる良い人である、という性格を考慮した可能性はなくもないのだが。

「文句言っなー。俺が一晩で必死こいて考えて準備までしたんだからなー」

『はい』

彼が努力家である事はよく知っている。それに文句を言うような生徒は、あたし達の中にはいなかった。

「制限時間はとりあえず午前中いっぱい。優勝者には多分きつと良い景品が当たるぞー」

「多分きつとつて……」

「言ってしまうえば、お菓子の詰め合わせだ」

『おっしゃー！』

景品を聞いた途端、一気に士気が上がった。まあ、お菓子というのは安くておいしくて、実は一番嬉しいご褒美かもしれない。

「勿論、獲得した点数が一番多い奴が勝ちだからな」

彼が間際に放ったこの一言で、あたしは目的を変えた。やはり、彼はこうした企画物をやらせるには適任のようである。ますます、このゲームが楽しみになった。

「よし、じゃあ特に質問が無ければ始めるぞー」

そういう訳で、るるん気分でスタート位置に着こうとしたのに。

「おい、集合」

ここで、湖山に呼び出された。

皆の熱気で温度が数度上昇している所から少し離れた所に、愛莉も辰弥もいた。どうやら、事務所に関する事らしいが、なんだろう。緊急の依頼でも入ったのだろうか。いやしかし、そんなものは我が事務所には初めから無かったと思い直す。という訳で、

「何なのよ」

あたしとしては割と正直に、要件を問い質す。

「我々だけの特別ルールを設ける」

『なんで！？』

今まででなかなか理不尽な難癖をつけてきた彼であるが、いやはや学校行事にまで首を突っ込んでくるとは。空いた口が塞がらないあたし達に、奴は予想もしなかったような条件を提示する。

「能力を使う事を一切禁ずる！」

「え……」

「ちょ……」

「いや……」

——最初から使う気無かったんですけど！？　むしろそこまでして勝ちたいってどれだけ負けず嫌いなもの！？

奴の不敵な笑みが何となく嫌な感じを醸し出していたのだが、まさかそこまで餓鬼だとは。まあ、奴が馬鹿だったおかげで、妙なルールにならずに済んだ事を喜ぶべきだろう。これで思う存分、ゲームに興じる事が出来る。

そういえば、それが高じてあたしの知らないうちに勝負を挑まれていたらしいのだが、その話は知らない事においておいた方が都合も良さそうなので、今は割愛する。

「ま、そういう訳で。お互い頑張ろうじゃないか」

ポン、と肩に乘せられそうになった手を、勿論華麗にスルーしてあたしは持ち場に戻った。

「……ちえ」

だから、湖山がそんなに悔しそうに、寂しそうに舌打ちをしていた事なんて、あたしは知らない。知る由も無いのだ。

「じゃ、用意」

その声で皆、戦闘態勢に入る。陸上部の子なんかは、見事なまでの美しいフォームでクラウチングスタートを決めている。お菓子がかかると、この年代の子どもは真剣である。

「スタート！」

実行委員の掛け声で脱兎のごとく、あたし達は一斉に飛び出していった。しかし目は獲物を追うハンターのように、鋭く研ぎ澄まされていたのを、周りにいた一般のお客様は見たそうな。

*

という訳で、僕らは僕らの目的を持って、トレジャーハントに挑む事になった訳だが。

「あつたー」

「こつちにも！」

「みーつけた♪」

他の奴等はほとんど、五点、十点のぬいぐるみを見つけている
ようで、あちこちから歓声が聞こえる。一方、僕はと言つと……

「うーむ」

適当にぶらぶらと公園内を歩きつつ、思考を巡らせていた。

——どこだ？ どこに隠した？

百点はピンポン玉サイズ。直径にして四センチメートル。したが
つて、どこにだって隠れられる大きさとなる。だが、他の大きな物
——五点、十点のぬいぐるみは、隠せる場所は限られる。そして、
わざわざぬいぐるみを泥で汚すような事はしないだろう。という事
は自然と、高い所にあるか、茂みの中にあるかという事になる。

ところが、先程からそこを中心を探しているのだが、百点はおろ
か、十点でさえ、一向に見つかる気配が無い。皆、どうやって見つ
けているのか不思議で仕方がなかった。

「うぐー」

そしてここで、通りがかった桃香の（本人的には何気ない）一言
が、僕のハートに火を点けた。

「え、湖山あんたまだ一つも見つけてないの？」

「ふっふっふ……」

「ちょ、え、どうし」

「僕を見くびらないでほしいな。もう、場所の見当はついてるんだ
から」

「そ、そう。じゃ、邪魔して悪かったわね」

僕の勢いに押され、彼女は足早に、逃げるように去って行った。
しかし、そうは言ったものの、お察しの通り、本当はまだ分かつて
いない。

——さて、どうするか……。

その時だった。

「おい、どうだ？ 調子は」

我々の様子を気にして、実行委員が見回りに来てくれた。

「ま、まあこれからだよ」

「がんばれよー。大丈夫、お前なら見つけられるさ」

すると、彼の頭の上に突然、ぬいぐるみの映像が重なった。それは、この公園のとある場所の風景と繋がっている。

——あれは……。

「見えた……」

僕は迷わず、その場所へと駆けだした。

「やはり、ここだったか……」

辿り着いたのは、この公園で最も大きな木の上だった。まあ高さとしては五メートル程だったので、僕には楽々登れたけれども。けれども、これで先程の実行委員の言葉の意味が分かった。こんな場所に隠したからこそ、彼は“お前なら見つけられる”と言ったのだ。木登りが余裕で出来るのは、この湖山優を差し置いて他にはいない。

「気分が良いなあ」

高い所から走りまわっている皆を見下ろし、まるで帝王になったような気分を味わっていたのもつかの間——

「ふっ、見つけたわよ、湖山」

僕は現実に引き戻された。

「な、何故ここが」

木から降りると、そこには桃香だけではなく、辰弥と愛莉の姿もあった。三人とも両手いっぱいぬいぐるみを抱えている所を見ると、どうやら粗方搜索は終わっているらしい。

「優の様子がおかしいから、皆で見に来たんだよ」

「そしたら案の定なんだもん」

「な、何の事かな」

内心は冷や汗を流しながら、平静を装って僕は答える。自分が思

いも至らない所で、じわじわ追い詰められている気がした。

そしてそれは勿論、的中する。

「あんたの負け、って事」

「優の負けだな」

「優君の負けだね」

「はい!？」

三人から同じ事を言われ、流石に動揺を隠せなかったが、

『だって、能力使っなくなって言ったの、自分じゃん!』

これには納得せざるをえなかった。

「あ……」

——しまった……。僕とした事が、探す事に夢中になって、すっかりルールを忘れていた……。

どうやら知らないうちに、僕は能力を発揮していたらしい。ちなみに、僕の力は僕が視た人の心の中が分かるというものである。それ自体は愛莉のものと似ているのだが、僕は心の中が全て画像化されて、その人の頭の上に見えるのだ。その為、必要な情報だけを正確に読み取ることが出来る。複雑に絡み合った人間関係も、これではつちり解決。現代人なら喉から手が出るほど欲しいであろう、優れものなのであった。

とまあ、僕の素晴らしさについて語るのは、別の機会にとっておいて。

「ふふふ……」

しかし全く、まさか僕の部下達がこんなに成長していたとは……。歯向かう事を知らなかった奴等が、あろう事かこの僕につっこみを入れてくるとは、数か月前は思いもしなかった。

「はーっはっはっは!」

こんなに嬉しい事があるだろうか。僕は、思わずこみ上げてくる笑いを抑える事が出来ない。

「優が「湖山が「優君が」

『壊れた!？』

「いやいや、見事なチームワークだ……」

うむ、彼らの息はぴったりと合ってきたようだ。よきかなよきかな。

「はい？」

しかし、尚も訳が分からないというような表情を浮かべる、我が所員達。そこで、僕はきちんと説明を施す。

「僕は君達を試していたのだよ。果たして、僕のこのいかさまに気付けるかどうか、とね」

「・・・」

負け惜しみにしか聞こえないだろうし、言い訳にしかとれないだろうが、この際気にしない。彼らの成長が見られただけでも、僕は満足だ。

それに……。誰が何と言おうと、これで優勝は僕の手の中にあるのだから。

「それじゃ、一位の発表だー！」

「おー」

それから数分後、制限時間となり、僕らは元の広場へと戻った。そして、待ちに待った結果発表となった訳である。

「栄えある第一位は……」

ドラムロールまで用意しているのは芸が細かくてよろしい事だが、もうすでに勝利を確信している僕にとっては、その間はじれったいものでしかなかった。

ところが。

「百二十点獲得、水鳶桃香ー！」

「おおー！」

呼ばれたのは僕の名前ではなく、あろう事が彼女の名前だった。

「なん、で」

それに百二十点だなんて、数え間違いではないかといちゃもんをつけようとしたら、

「あんだ、やっぱり聞いてなかったのね」

後ろから当の本人に止められた。

「何が」

この僕が彼の言葉を聞き逃すはずが無いと思い、失礼な暴言を撤回させるべく、彼女の方へと向き直る。

「実行委員はね、こう言ったのよ。獲得点数の多い人が優勝、ってね」

確かに、彼は最後にそう言っていた。しかし。

「……それとこれが、どう関係するんだ」

それはただの念押しではないのか。僕には桃香が言わんとしている所が、何も見えてこなかった。

「いい？ よーく考えなさい。うちのクラスは四十人学級よ？ 全員が楽しめるようなルールを考えたというなら、少なく見積もっても、四十個、あの子の正確なら五十は隠したでしょうね」

「それが」

なんなんだ、と続けようと思ったのだが、いい加減面倒になってきたのか、彼女はそのまま説明を続ける。

「仮に、五点が六割、いや七割でもいいかもしれないわね。で、百点はどう考えても一つでしょう？ そうしたら、十点は」

「……十以上ある、か」

「その通り」

実行委員の性格まで読み取るとは、手口が鮮やか過ぎて、ぐうの音も出なかった。

「ま、そこに気付けなかったあんだの負けね」

その後、お立ち台に立って両手でサンタクロースのそのようにめいっぱい膨らんだ袋を受け取る桃香を、皆は拍手で祝福し、僕は腕を組んだまま仏頂面で見っていた。

——まあいい。次がある、次が。

水鳶桃香、覚えていろ。僕は絶対、お前を超えてみせる。

お宝はんと（後書き）

そういえば優の能力をいつ明かそうか、と考えた時に、三人の能力を明かすのは流れの方が良いな、と思ひまして、その結果割り込み投稿で一番最初に持ってきた次第です。

他の話と流れが合うようには書いたつもりですが、違和感などありましたら教えていただけると幸いです。

文化祭ばにつく

心血を注いだ準備期間を終えて、いよいよ文化祭当日。この日ばかりは、朝早くから全校生徒が学校に集っていた。普段は遅刻すれすれでやってくる子も、眠そうな顔一つせず、気合いが入っている。私も一番乗りとはいかなかったが、文化祭実行委員として、クラスメイトの半分よりは先に登校していた。

調理の事は辰弥君に任せてあるので、私は装飾と、それから中で働く会計、店員などとの最終打ち合わせを行う。

「では、頑張りましょう！」

『おー！』

——こういう事務的な作業は得意なんだけどなあ……。

本当は、私が調理担当、辰弥君が此方をやるはずだったのだが、ちよつとした出来事により逆になってしまった。それで職務を投げ出す気は無いのだけれど。

「でも、やっぱり私には向いてないよなあ……」

「どしたの愛莉？ 着替えに行こうよ！」

「う、うん！」

ひきつっていても笑顔は笑顔。精一杯口角だけは上げて、友人の後をついていった。

さて。たかが中学校の文化祭であるが、喫茶店をやるからにはそれなりに衣装も凝った物を着用せざるを得ない。したがって、今私が着ている物も係の人が一針一針縫ってくれた、完成度の高い作品な訳である。あるのだが。

——フリフリエプロンって。エプロンドレスって！

大方の予想を裏切らず、黒を基調にした短すぎないワンピースに白のエプロンが装着され、おまけに胸の辺りには大きなピンク色のリボンまで完備されているという給仕服なのであった。というか、

私が原案を作ったので文句の言いようもないのだが。

しかし、鏡に映った自分を見ると、野暮ったい眼鏡とぼさぼさの二つ結びのせいで、全くと言って良いほど似合っていない。そもそも、私はこれがある人に着てほしいが為に作ったのだ。その彼女と言えば……。

「良いか皆の衆、此度は決戦じゃ！　しかし案ずる事は無い、わしが指揮を取る！　さあ、ついてまいれ！」

家庭科室で椅子の上に立ち、おたまを持って皆の士気を高めていた。

『親方様ー！』

いや、それを言うならお屋形様だよ、とつつこみたくなったがぐつとこらえる。私が調理場を覗きに来たのは、何も暴走を止める為ではないのだ。

「も、桃香ちゃん」

勇気を振り絞り、血気盛んな猛者達の奥にまで届くよう、声を掛ける。

「おー、愛莉ー！」

私に気付くと、桃香ちゃんは椅子からぴょんと跳び下りて靴を履き、此方に来てくれる。調理室は例えクラスメイトであろうと、スツプ以外の部外者は立ち入り禁止なので、いちいち来てもらわないと話も出来ないのだ。

「何かな？」

満面の笑みを浮かべる彼女にひるみそうになりながらも、

「や、やっぱり恥ずかしいよう……」

不満を口にする。否、正確には不安か。いずれにせよ、他の人には言えない心の内を、素直にぶつける。

「何言ってるの。皆と同じ格好じゃない」

「そうじゃなくて、私は裏方に」

「そんな事言わないのっ」

だって、と言いつつ続けようとした時、

「そうだぞ、愛莉。桃香じゃ俺の相方は務まらん」

後ろから聞き慣れた声がした。

「！？ 優君！」

「こいつが人に仕えるタイプには、明らかに見えないからな」

「まあ、そうね。あんたほどではないけど」

何故かは分からないけど、桃香ちゃんと優君はいつも険悪な雰囲気では話をする。お互いに認め合っているんだから、もっと仲良くすれば良いのに、いつも思っただが。

でも今日は、流石に長々といがみ合うつもりはないようで、

「そうだ、探したぞ愛莉。お前の姿が見えないから、皆心配してるんだ」

優君は要件を告げた。そういえば、誰にも言わずに更衣室からそのまま来てしまった事を思い出す。時計を見ると、時刻は九時五十分開始まであと十分だった。

「ごめんなさい……」

これは流石にまずかった。しぶしぶクラスに戻る。

「じゃ、よろしくねー」

手を振ってくれた桃香ちゃんの笑顔が、ちょっとだけ重たくて、私は後ろを振り向けなかった。

「い、いらっしやいませー」

そんなこんなで、私達の文化祭は始まった。初日である今日は校内だけなので見知った顔しかいないのだが、それでも緊張してしまい、上手く笑えない。

「本馬さん、もっと笑顔笑顔」

そんな私を見かねて、優君も時折気にかけてくれる。

——分かつては、いるんだけど。

それでも、自分は裏方で良かったのに、という劣等感のような後ろ向きな気持ち、私の顔を強張らせる。

その後も何かにつけてアドバイスをしてくれるのだが、自分達の

アイドルが他の女子を気遣うという構図がお気に召さなかったのだろ。

「……ねえ、ちょっと」

女の子の声が聞こえてくる。

「なんで愛莉が湖山君にあんなに優しくされてるの？」

「実行委員長なんか知らないけど、それで湖山君に近付こうなんて」

「優様は私のもののなに……」

「いや、それはおかしい。私のだから」

「なんだとー!？」

「それにしても……。鬱陶しいわね」

こそこそと、それでいて確実に、彼女達の言葉は私を苦しめていった。

*

「愛莉、大丈夫かなあ」

フライパンを振るのにも飽きるほど、ナポリタンを作っていた頃。不意に、朝の愛莉の様子が頭をよぎった。

「ん？　なんか言った？」

どうやらマスクの所為で、くぐもって聞き取りづらかったらしい。横で盛り付けを担当していた辰弥が、少し大きい声で聞き返す。

そんな事は気にも留めず、あたしは考えにふける。何故か、胸騒ぎがした。

「……ちょっと、見てくるかね」

ばさつとマスクを取り、エプロンを外してＴシャツにジャージ姿となったあたしを見て、仲間達に動揺が走る。

「ちよ、どこ行くの!？」

「桃香いなくちゃここやばいって」

確かに、料理のほとんどはあたしが作っていた。しかし、それは

まだ生徒だけだから出来る芸当である。明日この状況では、回転が悪くて仕方ない。

「大丈夫、気合いだっ」

それを防ぐ為にも、ここらで少し試練を与えなければ。幸い、そこそこの料理が出来るメンバーを事前にリサーチして仕込んであるのだ、何とかなるだろう。

「じゃなくて！」

それでも、突然いなくなる事に不安感があるのだろう。あたふたし始める彼らを前に、しばしの思考の末、判断を下した。

「……仕方ないな、今から五分で皆にエッセンスだけ、叩きこむ」
音にならない叫び声が、調理室内にこだました。

*

「ねえ、なんで愛莉が看板娘なわけ？」

「湖山君見る目ないわー」

「どうせ、あの子が目立ちたがっただけじゃないの？」

お客さんが少ないのもあって、女の子達は喋りつづけている。優君目当てに来たファンクラブの子達も加わって、その声はもはや最初の遠慮したものではなく、耳を澄まさなくてもはつきりと聞こえるものになっていた。

——嗚呼、まただ。

でも、例えばひそひそ話程度の小さいものであっても、私にははつきりと内容は聞き取れた事だろう。だって、それが能力なのだから。この能力を手にしたのは、実はごく最近、中学生になってからの事である。その頃はまだ桃香ちゃんと知り合う前の事だったが、入学当初、私はいじめにあっていた。野暮ったい黒縁の眼鏡、適当に二つに分けてくくっただけの髪。これでいじめにあわない方が不思議だと、自分でも思う。

実際は一過性のものであり、彼女達ももう忘れている程度の軽い

いじめであつたけれども、私にとっては辛い日々だつた。クラスの全員から無視され、いないものとみなされるあの感覚は。

この力は、その時身についたものだ。どうしていじめられているのか、何かしたのか。当時の私は何も分かつていなかったから。だから、人の気持ちが分かるようになりたいと、毎晩家を抜け出しては、町外れの神社に必死にお祈りしに行った。“困つた時の神頼み”を実行に移したのである。

そうして、十日ほど経つたある日の事であろうか。目が覚めると突然頭に聞こえないはずの両親の声が聞こえてきた。普段なら厚い壁に遮られて聞こえないはずなのに。

それから私は、声を聞き、なるべくそれに沿うように行動してきた。目立たず、かと言って邪魔にもならないように。上手く立ち回ってきたつもりだつたのに。

——どうして、こんな事になつちやつたんだろう。

優君も止めようとしてくれてはいるのだが、いかんせん彼のファンにつかまって成果は芳しくない。それに、お客さんでもあるのだから無下には出来ないだろう。

——やっぱり、私がいなくなるう。そうすれば良いんだ。

すつといなくなれば誰にもばれないはずだ。そう思つて、教室を出ようと足を踏み出した時、

「ほう。お主ら、まさかわしの目に狂いがあつた、とても言いたいのかえ？」

頼もしい少女の声が聞こえた。

『桃香……！？』

桃香ちゃんは大の優君嫌いなので、ファンクラブの方とは犬猿の仲にある。それなのに普通に話が出来るどころか、若干恐れられている所が彼女のすごい所だと思う。

「べ、別に文句って訳じゃないのよー？」

「ただほら、愛莉はもうちょっと明るくなつた方が良いんじゃない

かつつか、とまるで本当にどこかの將軍のように笑う彼女。その大物っぷりに圧倒されながら、

「そうじゃなくって、私の事だよ。あんな事言っちゃって……」

不安で仕方がなく、言葉を漏らす。

「ああ、それこそ何も心配はいらないわ。あたしが、愛莉に魔法をかけたげるよ」

ま、大船に乗ったつもりでいなさい。その力強い言葉に、私は身を任せた。

*

「皆の衆！」

「はー」

教室に戻ったあたしを、若干一名を除く皆はノリノリで迎えてくれた。そういえば、今日はどうして時代劇風なんだろう。その辺りは謎であるが、考えても結論は出ない類のものであると思う、部屋中央まで進む。そして、女生徒に囲まれて魂の出かけている少年の前に立ち、

「ちよつくら、借りるぞよ」

輪の中から奴をべりつと引きはがす。突き刺さるような視線が届いたが、気にしては身が持たない。

「じゃあ、愛莉の変身は終わったのね？」

「もつとゆつくりしてきても良かったのにー」

そのまま足早に立ち去ろうとするあたしに、後ろから皮肉が飛んできた。それらをにこりと笑って受け流し、愛莉を待たせている生徒用の控え室へと向かう。その道中、ようやく生きた心地がしてきたのであるう湖山がぶつぶつと愚痴を言い始めた。

「ふう、助かった……。しかし桃香、いくらなんでも酷くないか？」

いつもなら軽くあしらうが、今回は無下にも出来ないし。全く、いくら僕が対応に慣れていそうだからってあんまりだ。ぶつぶつ。

だが、取りあつてやる訳にはいかない。こちらには此方の事情があるのだ。というか、そこは湖山の方が分かっていると思つていたのだが。

「訳ありなのよ。それで女の子一人救えるんだから我慢なさい」

あたしが言つて初めて気が付いた、というように奴は反応を示した。この辺りがやはり、人間味に欠けていると言われる所以だと思う。

「嗚呼、それでか。お前にしては気を回した方だな」

「当然」

「で、愛莉はどうなつたんだ？」

なんだかんだ気にはなつていたらしい。あたしは堂々と胸を張つて答える。

「ふっふっふ。見たら驚くわよ？」

「……お前のその残忍な顔の方が怖いよ」

どうしてこいつは一言多いのか。心外な、とばかりに一発蹴りを喰らわせた。

*

数分の後、桃香ちゃんは帰ってきた。後ろに、げっそりとやせ細つた彼をつれて。

「ゆ、優君！ ごめんね！ 私の所為で……」

「そんな事はない。というか、何も迷惑はかけられていないぞ？」

優しい言葉に、思わず目頭がうるつとくる。

「そーいう事。ほい、じゃこれして頑張つて」

桃香ちゃんを取り出したのは、淡いピンク色のレースで出来たりボンだった。

「すごく綺麗……。どうしたの？」

「愛莉に似合うと思つてさ、前から用意してたんだ」

そう言つて、きゅっ、きゅっ、と手際良く私の髪に結び付けてく

れる。

「でも……」

似合わないよ、と逃げようとする私に、

「大丈夫、今のお前は可愛い。胸張っていつてこい」

優君が力強く声をかけてくれる。彼も、私と似た能力を持っている。勿論、私なんて到底及ばないくらい、強い力だけれど。でもだからこそ、言つて欲しい言葉が分かるのだろう。泣きそうになりながらも、二人の温かさに背中を押され、私は無理に笑顔を作った。

「うん、がんばる！」

*

その後は、まるで生まれ変わったように明るく元気に振る舞う愛莉に男性客が殺到。一時はどうなる事かとも思ったが、我がクラスの喫茶店は商売繁盛。一日目の学校内、及び二日目の一般公開共に好評で、用意していた食材もほとんど使い切り、完売状態で店仕舞となった。

「これもシェフの腕だね！」

「いやいや、そんな事無いよ」

「でも桃香いなかったら本当無理だったわー」

——そんな事ないんだけどなあ。

賛辞の嵐を適当にかいくぐり、辰弥と共に今回の功労者の元へ向かう。

「愛莉ー」

「つて愛莉か!？」

「あ、そっか。辰弥は初めて見るんだっけ？」

「ああ……。吃驚したあ。こんな可愛くなると思わなかったよ」

さらさらのストレートの黒髪、潤んだ漆黒の瞳。普段は眼鏡で隠されてしまっているだけに、今はその愛らしさが惜しげもなくさらされている。エプロンドレスも今では引き立て役だ。これには普段

から一緒にいる事の多い辰弥でも、見蕩れてしまつのは無理も無い。
「そ、そんな事無いよ！」

頬を赤く染めて照れる姿に、二人で悶えた。

「つて、愛莉はいつも可愛いじゃないの」

「それもそうだな」

あはは、と和やかに笑い、お互いをねぎらう。その中に突如、一つの毒が混ざった。

「愛莉、本当可愛いよー」

*

穏やかな雰囲気が一瞬のうちにぶち壊された。

「いつも眼鏡外して髪下ろしてればいいのに」

「ね、コンタクトにしたら？」

変わり身の術ばりに、急に猫なで声で親しげに話しかけてくる彼女達。その素顔は、私をファンクラブに引き込み、内部で鎮圧する事に飢えている。

「え、あの」

久々に向けられた悪意に、戸惑う事しか出来ない私。

「あ、そういえば先生が皆にお疲れ様って事でジューズくれるらしいよ」

でも、彼女の一言が、再び周りを明るくしてくれた。

「マジで！」

「先生探してくるー」

たったった、と彼女達は走り去っていった。嵐のような素早さである。

「ありがと、桃香ちゃん」

「何のこれしき。朝飯前でござるよ」

屈託の無い笑顔に、私は安堵する。思えば最近、彼女が能力を手に入れてからは、心の声が聞こえなくなった。他のメンバーもそう

なので、どうやら能力者同士は相性が悪いらしい。でも、それまでも桃香の心は澄みきっていて、裏表がなく美しかった。

「……見えなくても、分かる事もあるよね」

清々しい疲れと共に、二日間続いたお祭りは終わりを告げた。

文化祭ばにつく（後書き）

そんな訳で、愛莉と桃香の二人の視点でお送りしました今回の話ですが。

ついに能力について、詳細が明らかになりました。

次話も誰かの能力を解説しちゃいます。

そろそろ中盤に差し掛かってきたので、ストーリーも展開していきたいですね。

体育祭まじっく（前書き）

桃香と辰弥の二人の視点から、体育祭の練習模様をお届けします。
今まであんまり目立ってこなかった辰弥が、少し活躍しますよ。

体育祭まじっく

芸術、食欲でよく知られる秋という季節だが、彼には他の呼び名も存在する。その名も“スポーツの秋”。という訳で、何故か春と秋に行事が固まる我が中学校では、文化祭の約一か月後が体育祭に当たるのだった。

そうは言っても、文化祭みたいに先から準備しておくのが出来ないのが、体育祭のみそである。何故かは知らないけれど、文化祭よりも体育祭の方が練習に関するルールが厳しく、放課後練習が解禁されるのが、二週間前からなのだ。他にもいくつかルールは存在し、この時期には昇降口前にでんとおふれ書きのように掲示される。一度それを破れば、体育祭実行委員の、こいつら本当に中学生か？と疑いたくなるほどに強面の屈強な男達に連行されるので、皆真面目に守っている。まあ、こういう物は練習時間が如実に成果に現れるので、公平を期す為には仕方のない事だとは思う。

そして本日、お昼の放送で、件の体育委員会から、こんな宣言があった。

「全校生徒に告ぐ。我々体育委員会は、今日ここに放課後練習の解禁を宣言する！」

そんな訳で、本日から放課後、二時間の練習時間が与えられたあたし達は、

「文化祭で団結した俺らの実力、見せてやろうぜ！」

『おー！』

気合十分。グラウンドに駆けていったのであった。

しかし、そう上手くいかないのが、競技としての団体ものなのである。特にあたし達が力を入れる種目は、代々三年生だけがやるムカデ競走であった。一つの縄に輪っかをたくさんつけた物に皆で足を通し、まるでムカデのように動いてゴールを目指すレース。まさに一致団結、という言葉がよく似合う競技であるが、それだけにと

ても難しいのがこれであつた。

「うーん、なんで息が合わないんだ……？」

だが、練習を始めたばかりとは言え、二時間かけてほとんど開始位置から動いていない、というのは大いに問題があると思われた。現に、遠くで練習をしている他のクラスは、なんとなくではあるが歩けてはいる。あるクラスでは小走りぐらいの速度が出ていた。

「もう無理じゃね？」

「そんな、諦めちゃ駄目だよ！」

三日後。どうかこうにか歩けるようにはなつたが、まだ走れるようにはなっていないこの状況では、そんな言葉が出てくるのは無理も無い事だつた。しかし、そうは言ってもまだ始まったばかりなのである。コツが分からず上手いかないのは、確かにひどくもどかしい事であるが。

「所詮、うちらには運動系は向かなかつたつて事じゃね？」

拳句の果てには、練習も半ばにさしたというのにそんな事を言い出す人もいるものだから、最初の勢いは完全に失墜し、クラス内の雰囲気も段々ぎすぎすしてきてしまった。

そもそも、合わせる為の掛け声ですら、どうすればいいのだから、誰も分かつていなかった。一応、右、左、と足を出す時に言うという事で統一してはいるのだが、疲れてくると声を出さなくなる人もいて、それがさらに足並みをそろわなくさせている。それで転べばまた体力はそがれるし、何より痛いし、泥沼も良い所だつた。

「このままじゃ、まずいわね……」

本来ならば、力を使うのは人目を忍んで、それも人助けの為限定であるが、今回はまあ仕方ないだろう。ばれなければ多分、問題は無い。そして、ばれて問題がある湖山には、絶対に気付かれない自信があつた。これまで見てきて分かつた。奴には致命的な欠点、いや空洞がある。それに自分で気が付かない限り、このあたし、水鳶桃香が遅れを取る事は無い。

しかし、多少はためらつた。というのも、自分でも力にすぐ頼る

事が癖になっているのではないか、と思い始めたからである。それでも、使おうと思った。あたしの力は、人助けと言えど、ずっと視力の代わりとして働き続けているのだ。言うなれば、身の回りを見通す為に存在している。それならば、クラスを円滑に進める為に使っても良いはずだ。

という感じで自分を誤魔化し、もとい正当な理由をつけて、とりあえずあたしは、ムカデの縄を修理するから、と言ってお借りしてきた。まあその言葉自体に嘘は無く、実際に何力所か切れかかっている部分がある。ロープにストッキングをくくりつけただけのそれは、割と切れやすいのだ。うちのクラスのように転んでいたりすると尚更、接合部分に負荷がかかるらしい。

「よし、じゃあやるか……」

一人の時ならまだしも、こうやって複数の人が関わっている物から読み取るのは、かなりの集中力があるのだ。両親がまだ帰っていない事を確認し、汚れないように新聞紙を敷いてから部屋にムカデの足を広げ、深呼吸をする。それから気を一点に集め、心の中に問いかけた。

——教えてください。ムカデって、どう走れば良いの？

すると、徐々に風景が見えてきた。練習しているそれぞれの時代の生徒の想いが、あたしの中に流れ込んでくる。先代の先輩達が、一生懸命練習してきた記憶。成程、代々縄が引き継がれているというのは、本当だったようだ。

「よし、なんとなくつかめ、た……」

一時間後、膨大な量の記憶の束からエッセンスだけを読み取ると、あたしは疲れ果ててベッドの上に倒れ込んだ。

*

放課後、というか練習が終わった後、誰もいなくなったのを見計らって、俺はこっそり体育倉庫に戻った。そこには、体育祭で使用

されるいくつもの道具が眠っていた。

「ちょーいと失礼しますよ、っと」

俺——山上辰弥の能力は、皆のものとは少し違った。何せ、俺はこの力を生まれながらにして持っているのだから。

物心ついた時から、俺には物の本質のようなものが見えた。物の魂、とでも言えば良いのだろうか。初めて使う物でも、どうやって使うかが分かるのだ。

そんな訳で、小さい頃の俺は神童ともてはやされていた。もっとも、それが通用したのは、小学校も低学年のうちまでだったけれども。段々と周りが見えてくると、皆には自分と同じ物は見えていない事を知った。人は、自分と違うモノを排除したがる習性を持つ。したがって俺自身が、この能力を失いたい、皆と一緒にの“普通”が良い。そう、願うようになってしまったのだった。

そんな悩める俺に、理由を教えてくれたのが、神主だった祖父であつた。

「お前のその力は、神様からいただいた大切なものだからね。大事にしなさい。そして、お前が困った時、お前の友達や大切な人が大変な時に、使いなさい」

いつもしかめっ面の厳格な祖父が、にこやかにやわらかい言葉を発したのは、覚えている限りではこれが初めてだった。あの俺の頭を撫でる手の温もりは、今でも忘れられない。

それ以来、俺は力について悩むのを止めた。そして、無自覚に使っていた力を制御する事に努めるようになる。これにも、祖父が協力してくれたりして、中学に上がる頃にはすでに、コントロールは完璧に出来ていた。

だから、優に誘われた時、俺は驚いた。どうしてばれたんだろう、って。

「俺には心の中が見える。だが、何かしらの能力があると見えない。辰弥、お前の心は見えなかった。ただ、それだけだ」

いやそれだけで判断するなし、と思っただが、そのあまりにも自信

過剰な態度に、こいつならついていっても大丈夫かもしれない、と何故か思った。

「よし、じゃあやりますかね」

しかし、最近はやみやたらに使わないようにしている。ずるいような気もするし、何よりそうやって悪目立ちするのはもう、こりごりだった。まあ、それと事務所の方で力をあんまり使わないのは、また別の話ではあるけれども。

ただ、今回は事情が違う。俺は居心地の悪い空気には、あまりとつかほとんど耐性がない。あんなにぎすぎすして中の悪いクラスになど、いても楽しくないではないか。そういう訳で、探偵社の活動でもほとんど使う事の無い力を使う事と、相成ったのである。

そんな訳で、本格的に力を使うのは久々なので緊張するかとも思ったが、案外そうでもなかった。昔は呼吸するのと同然に行っていた事なのだから、当然と言えば当然なのかもしれない。

——君達は、どう使われない？

「ふむふむ、成程ね……」

*

「しまった……」

翌朝目を覚ますと、昨日倒れ込んだそのままの格好で、あたしは眠りについていていた。

しかし、得た成果はそれなりのものがあつたので、大人しく支度をして、学校へ向かう事にした。

ここ二カ月ぐらい授業をおろそかにしているなあと危機感を持ちつつ、かと言って真面目に聞ける訳も無く、適当に受け流して放課後。練習を始める際のいつもの作戦会議で、あたしは昨日見た事を早速提案する事にした。

「あのね、先輩達からポイントを教えてもらってきたんだ」

「本当に？」

半信半疑の皆。無理も無い。大体、そんな方法があるなら、最初から教えてほしいぐらいだろう。まあ、ここまで上達しないと思わなかったからこそ、今までは何もせずに自分達で頑張ろうと思った訳だが。ところが、上手くいっている他クラスに探りを入れてみると、なんと兄弟姉から話を聞いているというではないか。だからこそ、あたしも本気を出した、という訳である。

「それはね」

少しもつたいぶって注目を集めてから、あたしは

『皆の心を一つにする事！』

と宣言した。その時、何故か辰弥の声とシンクロしたのである。

「そう。だから、具体的な練習方法もばっちり聞いてきたよ」

それから、彼はさも聞いてきたかのように、皆に説明を始めた。並んだ時の背の高さを合わせ、力をかけやすくする事、掛け声は右足を踏みだす際に“ハイ”と一回だけ言う事、足並みをそろえる為に、最初に円陣を組んで練習する事。熱っぽく話す様子に皆も徐々に乗り気になって、食い入るように辰弥の話を聞いている。

「最後に。俺達は今まで、皆を信じてやってきた。ちょっとやそつとで上手くはならないかもしれないけど、それがあれば大丈夫。絶対上達する」

——成程ね。

途中から良い所は彼にとられてしまったが、なんだかんだ、クラス想いの生徒が揃っているなあ、と少し嬉しくなった。

*

「山上君すごい、本当にちょっと上手くなってきたかも！」

「いやいや、皆が力を合わせればざっとこんなもんだよ」

水分補給を兼ねた休憩中、皆が俺に称賛を投げかける。確かに、

今日の練習では普段よりも格段にスピードも出たし、息も合っていた。これならなんとかなるかもしれない、と思ってくれたようで何よりであるが、少し恥ずかしい。

——うん、やっぱりこういう事は、桃香に任せの方が良かったかな。

俺がでしゃばる形になってしまって、彼女には若干申し訳ない気持ちになっていた。

「辰弥君、本当すごいね！」

そう、少し物思いにふけていると、愛莉がこそこそ、と此方に寄ってきた。そういえば、探偵社と桃香がいる時を除いて彼女から話しかけてくる事は珍しい。

「そんな事ないよ」

愛莉は俺が能力を使った事に気が付いていて、そう言っているのだろうか。などと邪推していたのだが、

「私、運動苦手だけど、今皆で走るのはすごく楽しい！」

それはどうやら杞憂に終わったようだ。ただ単純に、よっぽどそれが嬉しかったらしい。身構えた分、その笑顔が俺の心を癒していく。

「そ、そろそろ休憩終わりだな。後半も頑張ろうぜ！」

「うんっ」

少し赤くなった顔を見られないように、俺は先に立ち上がった。

「明日もこの調子で頑張ろう！」

『おー！』

今日は本当に良かったね、皆の息がぴったり合ってて、本当に一つになったみたい。

練習後、いつもの暗くて重苦しい溜息とは違い、明るい声があちこちから聞こえてきた。これでこそこのクラス。俺も気分良く、教室へと戻ろうとした。

「辰弥」

「んー？」

その時、後ろから声を掛けられた。今度は桃香だった。

「あんたも力、使ったでしょ？」

——流石にばれてたか……。

その事が分かったら、彼女以外にはいないと思った。同系統の能力者という事だけではなく、その持前の推理力で物事の本質を見抜く事に長けているからである。まあ、今回はばれても仕方ないと思っただし、何より桃香だって力を使っていたようだから、お互い様だろう。俺の周りに人がいなくなってから話しかけた事も、彼女らしい配慮だ。

「あー、わりい。どうしても我慢出来なくなつて」

だからここは、素直に謝る。これで罪悪感も消えた。

「ううん。むしろ助かった。そうね、物の事は物に聞いた方が早いもんね」

なんでも、桃香の能力では断片的な記憶しか出てこないの、具体的な方法までは読み取る事が出来ないらしい。だが、俺なら直接、物に呼び掛ける事が出来る。よく理屈は分からないが、九十九神の延長線のようなものだ。同じ物を見る能力でも、これだけ違いが出るというのには最初、驚いたものである。

「一本取られたわ」

そう言つて彼女はにかつと笑い、俺達は固く握手をする。輝く夕日と共に交わした友情は、俺の中でキラキラときらめいていた。

*

そして、一週間後。美しく澄み渡つた秋晴れの日に、予定通り体育祭は行われた。

最後に行われたムカデ競走では、接戦ではあったが、惜しくもあたし達のクラスは第二位で終わった。あと少しの差。悔しかったし、中には泣き出した子もいた。

けれども、終わった後の何とも言えない皆の満足そうな、清々しい顔は何物にも代えがなかった。

体育祭まじっく（後書き）

ムカデ競走とか懐かしいなあ、と思いながら書いてみました。
文化祭の方では当日をメインにしたので、体育祭では練習をメインに。

なんとなく二本セットなお話でした。

こいこがれ聖なる夜（前書き）

クリスマスに乗っかう第二弾！

という訳で、翼探偵事務所の面々もパーティーをする事になりました。

実は大事な分岐点のこのお話。年明けに彼らは一体どうなっていくのか。

お楽しみいただければ幸いです。

こいこがれ聖なる夜

「じんぐるベーるじんぐるベーるすずがーなるー、っと」

愛莉が歌いながら、楽しそうに部屋をくるくると忙しそうに動いていた。平和な放課後の、とある一幕である。

「何やってんだ？」

にもかかわらず、そんな無粋な質問をするのは野暮というものではないだろうか。まあ質問の主は私達の中では空気が読めない男、湖山優だったから仕方が無いとは思うが。

「クリスマスの飾り付けだよ」

まあ、うきうき気分为爱莉はどこ吹く風。対して気にした様子も無く答える。

「くりすます、だ、と」

何がそんなに奴の気に障ったのかは分からないが、その単語を聞いた途端、湖山は青ざめた顔で固まってしまった。

そんな彼を、勿論あたしは無視して、

「こんなんでいい？」

愛莉に頼まれていた物を見せる。

「わー、桃香ちゃん器用ー！」

物は飾り用の切り絵だった。王道の星や花から、クマが手をつないだようなものまで、何種類か作ってみたが、我ながらなかなか上手く出来たと思う。

「そ、そんなものを」

飾るんじゃない、と言いたかったのだろう。ようやく復活してきた湖山が注意をしようとしたが、

「おーい、木もらってきたぞー」

用があるからと言ってどこかに出掛けていたはずの辰弥が、植木とは言え身の丈ほど大きなモミの木を持って帰ってきてしまったのは、後の祭りというやつであった。

「どういう事なんだ全く……。大体、そんなでかいものを入れるなよ……」

あまりにも事が進んでいて、もうつつこむ気力も無くなったように、奴はぼやくにとどまった。

「折角だし、大きい方がいいじゃんかー」

「片付けするからー」

「むー」

尚も納得いかなそうな様子の彼に、辰弥が哀愁漂う表情で止めを刺した。

「いいじゃん、俺んとも神社で肩身狭くって、クリスマスパーティーしたかったし」

奴がついに、黙った。折れたという事らしい。

「決まりね」

『やったー!』

ぴよんぴよんと跳ねて嬉しさを表現する愛莉と辰弥。……この子達、本当に中学三年生だろうか。これはこれで、心配になる二人である。

「では、二十五日午後三時にここに集合。それまでに各自、五百円以内でプレゼント交換用のプレゼントを用意する事。ケーキは愛莉、お菓子は桃香、辰弥は飲み物を用意しておいてくれ。僕は皿やコップを調達しておく」

『って仕切るの早っ』

彼らがはしゃいでいる間、ものの数分しかなかっただろう。湖山の立ち直りの早さに、驚かざるを得なかった。だが、それだけではなく。

「しかも、すごく的確だし」

そう。まるであらかじめ用意していたかのような、見事なまでの指示なのだ。あれだけ“クリスマス”という言葉に拒絶にも見える反応を示していた割には、あまりにも手際が鮮やか過ぎる。そこで、奴の性格を考慮してみたら、ある仮説に思い当たった。

「はっはーん、湖山。さてはあんた、実はクリスマスパーティーやりたかったのね？」

「・・・」

『あ、黙った。図星だ』

どうやら、あたしの考えは的中していたらしい。しかしそれを誤魔化すかのように、彼は照れ隠し見え見えの言い訳をする。

「う、五月蠅いなっ。僕の家でも、やらないんだよ……」

「へえ」

湖山の弱みを握った気がして、少し気分が良くなった。

「と、兎に角、今日は飾り付けが終わったら解散だ。明日はきつと、桃香と愛莉は家でやるんだろう？」

「多分、そうね」

「私も二十四だなあ……。そういえば」

ここでふと思いついたように、愛莉が言った。

「なんで最近皆、二十四日にお祝いするのかな？」

その素朴な疑問に、あくまでも推測でしかないが、と前置きして湖山が仮説を披露し始める。

「まあ、一つ考えられるのは、我々はキリスト教徒ではないという事だな」

「うん、そうだね」

「でもそれが一体、何の関係があるんだ？」

まだ分からない様子の彼らに、あたしからも説明をする。

「じゃあそんなあたし達が、何を一番楽しみにするかは、分かるわよね？」

「プレゼント？」

「そう。それがもらえるのは？」

「二十四日の夜！」

「正解。まあ正しくは二十五日の未明ってところかな。それを考えると、子ども達のテンションのピークは二十四日の午後十時辺り。最近じゃ夜更かしする子も多いから、もう少し時間は遅くなるかも

しれないけれど。いずれにせよ、二十四日夜から二十五日明け方
てのが、日本人のクリスマスみたいね」

「あと、前夜祭とか好きだしな」

湖山に良いとこどりされたのが不服だが、まあおおよそ、そんな
所だろう。

だが、こんなに詳しく解説したのに、逆にそれが不満だったよう
で、

「よく分かったけど、クリスマスをそんなに冷静に分析しないでー
！」

全力で叫ばれてしまった。

『いや、聞いたの愛莉じゃん』

これには流石につつこんだが、その結果として奴とハモるなどと
いう不名誉極まりない事をしてしまった。不覚。

「そうだけどー」

尚もふくれっ面で彼女はぶつぶつ文句を言う。

「もっと夢のあるお話が良かったなあ」

ぶう、とむくれた姿を見た辰弥が、あたし達を代表して言った。

「愛莉は本当可愛いなあ」

そして、小さい子にするように頭を撫でる。だが、そこに微笑ま
しさと優しさの他に、何か別の感情が見えたのは気のせいだろうか。

「もう、あたし子どもじゃないのよっ」

怒ってる姿も可愛いなあ、とは流石に言わなかったが、心の中
は全会一致で思っていた事だろう。

そうこう喋っている間に飾りつけは終わり、あたし達は帰宅した。

そして、三日後。

「めりーくりすまーす！」

待ち合わせをした訳ではないが、なんとなく三人で事務所を訪れ
る事になったあたし達がまず目にしたのは、赤い服に白いひげの男

ケーキに舌鼓を打ち、お菓子をたらふくたいらげた所で、

「ではではそろそろー」

「お待ちかねのー」

『プレゼントこうかーん!』

サンタとトナカイが右腕を高く上げた。ちなみに、サンタの正体は言わなくても分かるだ

ろうが、トナカイは辰弥が着替えたものである。わざわざ自前で用意してきたのだ。それだけ、楽しみにしていたという事だろう。だろうけれども。

「ちよつと待つて。なんで二人ともそんなにテンション高いの……？」

きやつははー、と楽しそうに笑う彼らを見て、あたしはとっさに、
「まさかこれ……シャンパン……？」

飲み物に疑念を抱いた。

「いや、炭酸飲料だよ。名前は似てるけど、まごう事無き炭酸飲料だよ!？」

そしてその疑い加減は、愛莉がツツコミを入れるほどだったようだ。

「炭酸で酔える性質……？」

「もしくは、雰囲気酔ったか、だね」

「よっぽど嬉しかっただねえ。クリスマスパーティー」

そんな風に、あたしと愛莉がほのぼのと彼らを見ていたのだが、

「さー、くじを引いてくれー。番号と同じ奴を持っていくが良い!」

「そんな上から目線のサンタは嫌だー!」

やっぱり湖山は、湖山でした。

『けっかはーっぴょー』

しかし、二人のテンションは冷めやらぬまま。どうやら今日はこのまま行くらしい。盛り上がるのは良い事なので、乗りはしないが

プレゼントは開ける。

「ん、なんだろうこれ」

「わーい、あたしのはぬいぐるみだー」

『つてもう開けてるし!?!』

だって結果発表って言ったじゃん、と文句も付けられないくらい、
彼らは膝をがつくりと落として凹んでいた。

「え、だ、ダメ、だった?」

その落ち込み具合に申し訳なくなつて、尋ねる。

「もつとためにためて開けるのが良いんじゃないか……」

「ドキドキ感を味わうとか、そういうの無いのかよ全く……」

『な、なんかごめんなさい』

だが、乗りの良さに応じて切り替えも早くなっているようで、

「まあいいか。ちなみに、そのぬいぐるみは僕からだ、愛莉」

珍しく長々とつかかる事もなく、正直にネタを明かす。

「え、本当!?!」

聞いた途端、ぎゅうとそのサイのぬいぐるみを抱きしめる愛莉。

まあデフォルメされているから可愛くはあるが、何故サイなのか。

その辺りに、奴のセンスがある意味光つていると言える。

「桃香のは俺から」

「成程ね」

妙に固いので何かと思つたら、あたしがもらったのは絵本だったのだ。辰弥は読書好きで有名だし、しかもそれがくまたくろーすのものだったので、尚更納得だ。

「桃香に当たって良かったよ」

どうやら、話題に上がったからわざわざ買ってきてくれたらしい。
これは、家に帰って早速読まなければ。

あたし達が中身を確認し終わった所で、男性陣二人も包みを開いた。辰弥の方は水色と緑が混ざったような淡い色合いの、湖山ははつきりとした赤の、両方とも布だった。

「辰弥君のは私のだー」

「おお、ブックカバーだ！ 手作り？」

「う、うん」

「嬉しい。ありがとう」

これまた、本好きの辰弥にはぴったりのプレゼントだが、そういえばこのメンバーは皆読書家だった事を思い出した。その辺り考えてプレゼントを用意するこの二人は、やっぱり思いやりにあふれている。

「って事は、優に桃香のがいったのか？」

「口惜しいがな」

「タオルか。ありがたく使わせてもらおう事にしよう」

「無理して使わなくても良いのよ？」

今日ぐらいいは嫌味を言わないようにしようと思ったが、習慣付いているので無理だった。

「ほいじゃ。また」

「またー」

楽しかった時間はあっという間に過ぎ、南中していた太陽もすっかり地平線のかなたに沈んでしまった頃、あたし達はそれぞれの帰宅路に着いた。

『メリークリスマス！』

*

——今日は、とっても良い日だったなあ。

胸に抱きかかえて持っている、サイのぬいぐるみを見つめる。これを、どんな気持ちで優君が買ってきたのか想像するだけで、心がほころぶ。ファンシーシヨップか、おもちゃ屋さんか。いずれにせよ、買いづらい場所であつただろう。そんな場所で、でも一生懸命選んだのだろう。……駄目だ、笑みが止まらない。

「私、やっぱり……」

優君が、好き。

*

手作りのブックカバー。愛莉からの、プレゼント。本当はガッツポーズをして、跳び回ってはしゃぎたいぐらいに嬉しかった。それをしなかったのは、まだこの想いを伝えられそうにはないから。でも。

「俺、やっぱ……」

愛莉の事、好きだ。

*

クリスマス、か。

僕の家では、実はパーティーをしない訳ではない。だが、両親が忙し過ぎて、必然的に僕と使用人だけが食卓に並ぶ事になってしまふのだ。それはなんだか、パーティーとは言わない気がする。だから今日は、少し嬉しかった。嬉しかったから、はっちゃけた。悪い事だとも思わないし、一過性の事だと、皆思ってくれるだろう。ただ。

——僕がそういう人物だと知ったら、皆どう思うだろう。

学校での僕、本当の僕。僕は、もはやどれが自分だか分からない。それでも一つ、言える事があるとすれば。

「僕は桃香の事が、気になって仕方が無い」

それだけは、変わらないのだ。

*

帰宅して、親がツリーに吊るしていた靴下を横目に見て、あたしは自室のベッドにもぐりこんだ。楽しかったが、少々疲れた。お風

呂の順番が回ってくるまで、まだ時間があるだろうから、ひと眠りする事にしよう。

うとうととまどろみながら、先程見た靴下の事を思い出す。プレゼントが沢山入るように、とわざわざ大きな物を用意していた、夢と希望に彩られる、赤と白のそれ。

「サンタクロースなんて、いる訳は無いんだけど」

——でも、もしもいるなら、見てみたいものだわ。

そして、会う事が出来たのなら是非、こんな質問をしてみたいものである。

——あなたにとってのサンタクロースは、一体誰なんですか？

それぞれの想いはらみつつ、夜は静かに更けていった。

新年早々はつじけん

本当に駆け抜けるように、あっという間に年は暮れ、新しい年を迎えてしまった。中学生でいられる期間も、残りわずか。皆と居られる時も、探偵事務所を騙って遊んでいられる時間も、あと少し。なんて、そんなセンチメンタルな気分新年早々なる訳もなく。

「桃香ちゃん！」

「桃香ー！」

「来たか」

本日は我が探偵事務所の面々で、初詣と相成ったのである。いや、いつも愛莉と辰弥と来ていたから、実感としては一人増えただけなのだが。

「あけましておめでとう」

『おめでとう』

あたしが集合場所に着いた時には、すでに皆そろっていた。一応、五分前には着くように計算したのだが、どうやらこの面々は早め早めの行動を心がけているらしい。待ち合わせの時間に遅れた訳でもないのに、湖山が何か言いたそうにして何も言えないのが良い気味だった。

そしてふと、愛莉の格好が普段のそれでない事に気が付く。いや、みんな流石に制服ではないし、辰弥に関しては毎年の事だからそこまで注目する事でも無い気もするが。

「愛莉、その着物よく似合ってる」

「本当？　ありがとう」

そう、珍しく彼女が着物姿だったのだ。薄桃色に梅の花が咲き乱れていて、落ち着いた紅色の帯が引き締めている。とても素敵に着物だった。

「そんなところで嘸つくかよー。可愛いよ、愛莉」

「うむ」

満場一致の意見に、彼女は気を良くしたようだ。ちなみに、辰弥は神社の息子なので、毎年袴である。というか、お参りに来たのも実は彼の所なのだ。この辺り唯一の神社なので、中は参拝客でこつた返している。

「ありがとう。嬉しい」

はにかみながら言われてしまうと、こちらまで照れてくる。後から聞いた事だが、辰弥はカメラを持ってこなかった事を、本気で後悔していた。

「おばあちゃんの家に行ったら、もう着ないからってもらったんだ」

尚も楽しそうに、くると回りはしゃぐ姿を、あたし達は温かい眼差しで見ていた。

「ねえ、何お願いしたの？」

参拝を終え、適当に境内を歩く。この時期は色々出店もあり、お祭りみたいでにぎやかで楽しい。その道すがら、先程神様に言った願いを聞いてみたのだが、

「秘密」

「願い事は人に言うものじゃないぜ、桃香」
上手くかわされてしまった。残念。

「まあ、それもそうね」

「それはそうと、お守り買わないか？」

こちらにも、願い事を聞かれたくはなかったようだ。露骨な話題転換ではあるが、良い提案には違いない。

「うん。おみくじも引こうよ！」

「じゃあこつちだ」

やはり、服によって気分は変わってくるものなのだろうか。やけにノリノリの着物姿の二人に連れられ、吉凶を占う事になった。

箱に代金を入れ、抽選箱のような箱からくじを一つ取り出す。こ

この神社は棒を引き出すタイプではないので、これがそのままおみくじになっているという訳だ。しかし、いくつになってもきつと、取り出す時のこの緊張感は押さえられないものだと思う。

「皆、くじ持った？」

「おう」

「じゃ、いくぞよ」

『せーの』

そんな内心のちょっとした動揺を悟られないようにしつつ、中を開く。

「わー、大吉だ！」

「おー。すごいな愛莉。俺は中吉だ」

「あたしは吉」

ここまででいくと、大吉・中吉・吉なので、あたしが一番悪い事になる。

「優君は？」

だがそこは流石、期待を裏切らない男、湖山優。

「……凶」

『ある意味すごいっ』

なんと、所によつては大吉よりも本数が少ないという凶を引いてみせたのだ。内容も見せてもらったが、なかなかえげつない事が書いてある。しかし、おみくじというのは案外そういうものなのかもしれない。あえて厳しい事を言つて、やる気を出させるもの、のような気がする。

ちなみに、余談ではあるが、あたしは彼に半吉、あるいは末吉を期待していた。なんというか、この微妙過ぎて誰もつつこめないけどあたしより下、みたいなラインを期待していたのに。どうやら今年、笑いの神は湖山に降臨したみたいだ。

「良かったわね、湖山。それは大吉よりも価値があるわ」

まあ色々言つたが、凶を引いた人を生で見るのは初めてだ。素直に感心し、感服する。

「そうだよ、優。おいしいぞ」

「・・・」

そんなあたしと辰弥の激励は、残念な事にフォローにならなかつたらしい。まだ顔に縦線が入っている湖山を見かねて、愛莉も言葉を添える。

「まあまあ、ご神木に結んでおけば大丈夫だよー」

「そ、そうだな」

ここで、ふと愛莉の手を見ると、おみくじが握られて無い事に気が付いた。

「つてあれ？ 愛莉、お前大吉なのに結んじまったのか？」

あたしより先に気付いた辰弥が、不安になってそれを尋ねる。

「え？」

「お前……知らないのか？ 結び付けの意味を」

「あれは、湖山みたいに凶とか引いちゃった人が、運勢が良くなりまずようにつて結ぶのよ」

「そ、そうなんだ……」

どうやら、毎年お参りに来ている割には愛莉も知らなかったようだ。そういえば、彼女が大吉を引いたのを見たのは、初めてかもしれない。

「まあ風習だし、後で結びに来るんだから良いんじゃないかな？」

「そうなら良いんだけど……」

愛莉まで凹んでしまって、重たくなってしまった空気を払拭しようとして、

「ちなみに、“凶のおみくじを利き腕と反対の手で結べば、困難な行いを達成することによって凶が吉に転じる”という説もある」

神社の息子が豆知識を披露する。それを聞いた途端、

「なんだと!？」

湖山は復活した。全くもって、単純明快な奴である。

「……よし、やるか」

しかし、使い慣れていない方の手で結ぶというのは、事その他難し

いらしい。成程、運氣を変えるほどの行いは、やはりそれ相応の難しさをはらんでいるという事か。

「自分への戒めに持って帰っても良いのよ？ 別に」

苦戦している彼に、あたしは助言をしてやる。すると、予想通りの反応が返ってきた。

「し、失礼な。僕を誰だと思っているんだい？ このぐらい朝飯前だよ、朝飯前」

そして、何事も無かったように、作業に戻っていく。そんないつものやり取りを見て、愛莉が吹き出した。うん、これなら大丈夫だろう。

「結ぶつてのは縁結びと繋がっている。むやみに捨てないで結んだんだ、大丈夫だよ」

「うん……」

すったもんだはあったものの、初詣を済ませたあたし達は、人のにぎわう街の中心街へと足を運んだ。

今日のもう一つの目的。それは、最近出来たショッピングモールの初売りを狙いに行く事であった。

「すげえな……。人がゴミのよう、失礼、人でごった返している」

「……はぐれないようにしないとな」

着いた途端、先程とは比べ物にならないぐらい、桁違いの人の量に辟易する男性陣と、

「あ、あつたよ桃香ちゃん！」

「お、愛莉のお気に入りのお店だね」

そんな人混みをものともせず、お目当てに向かって突き進む女性陣という構図が、すでに完成されていた。

「行ってくるねー」

「この辺で待ってて」

『りょーかい』

付き合わせるのも悪いかと思い、辰弥と湖山を置き去りにして一時間後。

「お、お待ちせー」

「……済まない、待たせ過ぎた」

『おう……』

戻ってみると、その間に二人はやつれていた。まあ、これだけの人に囲まれて無事でいるという方が、おかしいかもしれない。

『ごめんなさい』

あたし達は素直に謝罪した。

「買ったのか？」

「うんっ」

「まあ、そこそこ」

あたしは雑貨屋のものしか買わなかったが（前に洋服のを買って痛い目を見ているので）、愛莉は最初の店を含め、合計四つ福袋を購入していた。これは大収穫と言ってよいだろう。その旨を告げると、

「お前……。すでにその年にして堅実すぎるだろう」

「この後セール品を狙うんだよな、分かってるよ……」

と言われてしまった。凶星過ぎてぐうの音も出ない。何故そんな事までお見通しなのかは分からなかったが、それは一先ず置いて「それにしても、おこづかい大丈夫？」

子ども用とは言え、福袋というのは値が張るものである。年明けからこんなに散在してしまつて良いのだろうか、と心配になった。だが、それは無用だつたらしい。

「うん。お年玉いっぱいもらつたし、私は福袋で一年過ごすタイプだからね」

「成程」

まあ制服があるうちはそれでも何とかなる。彼女の言い分に、あたしは納得してそれ以上言うのを止めた。

しかし、それに待つたを掛けたのが、先程は見事な推理を披露し

た男共。

「え、何その」

「福袋で一年過ごすって」

——どうしてそっちは知らないんだ!?

彼らの知識が、家計を守るお母さんの知識からきているものだとその時見抜けなかったあたしは、心の中だけで盛大につっこみを入れつつ、平静を装って解説する。

「店にもよるけど、春夏秋冬関係なくオールシーズンの洋服が詰まってる事もあるのよ、福袋って」

『へー』

「帰ったら開けるんだー。楽しみ」

兎にも角にも、愛莉に笑顔が戻ったなら、それでここに来たという意味はあるものだ。

「良かったねえ」

「特に、これ!」

「ああ、最初に入って行った店の」

「最後の一個だったんだよー」

「ついてるな」

福袋を振り回さんばかりに腕を動かし、陽気に歩く愛莉を先頭に、あたし達はその後もショッピングモールの中を、ぶらぶらふらふらと歩く事にした。

けれども、愛莉の“つき”はそれでは止まらなかった。

ショッピングモールで行われていた抽選では、四等の商品券を当たった。その商品券で買ったお菓子も当たってもう一つもらっていた。あたし達もそのおぼれに与った訳だが、いやはや愛莉さまさまであった。

一通り歩き、休憩にとフードコートでお菓子を咀嚼している時である。ふと、レストラン街の“新年会ご予約承り中!”というポスターが目に入った。そこであたしは、

「ねえ、新年会やらない？」

すぐさま提案してみた。忘年会はやらなかったが、クリスマス会があったのだから、新年会があっても良いと思ったのだ。

「いいな」

「じゃあ、飲み物とか買って行っちゃおうかー」

どうやら、皆端から事務所に行くつもりだったようである。体力を回復させ、食料を調達する事にした。

そうして、いざ行かんとした所で、

「あ……」

愛莉が立ち止まった。顔色が真っ青である。

「どうしたの？」

慌てて、彼女に駆け寄りあかし達。気分でも悪くなったのかと思ったのである。だが、彼女が顔面蒼白させた理由は、別の事であった。

「ない……」

「ないって、何が？」

「ふ、福袋が」

そこまで聞いて、反射的に彼女の手を見たら、そこには三つしか袋が握られていなかった。

「福袋が、ない」

とっさに、あたし達は辺りを見回すが、人が多すぎて判断が出来ない。

「落としたんじゃないのか？」

「どこに置いていた？」

「目に見える範囲には、ずっとあったよ」

一先ず彼女をベンチに座らせ、あたし達は今日行った場所を思い返していた。だが、初めて来たという事もあり、どの階もくまなく周ったのだ。そちらからの特定は厳しそうに思える。

「とりあえず、サービスカウンターに行ってみよう。あそこなら落

し物として届いているかもしれない」

考えが煮詰まってきた所で、辰弥が言った。確かに、これ以上ないぐらいの正攻法である。

「でも、どののだ？」

それに待ったをかける湖山。それにはあたしも同意だった。何故なら、

「このショッピングモール広いから、各階に二つはあるんじゃないかしら」

「合計十個近くか、それ以上……」

今まで楽しんでいたこの広さが、仇となるからだ。

「で、でもどこかに行けば、連絡とって探してくれるんじゃないか？」

「そうだな。よし、行こう」

「いや、あそこにあるみたいだし、俺が行ってくるよ。待っててくれ」

数分後、辰弥が肩を落としながら帰ってきた事で、結果は明白だった。

「どこにあるんだ……？」

彼の着眼点は、おそらくとても良い。正解に限りなく近いはずだ。でも、何かを見落としている。何だ、何なんだ……。

ゆっくりと思考を巡らす。すると、ある事に気が付いた。

「分かった……」

多分、あそこだ。間違っていない事と、彼女の幸運を祈りつつ、あたしは人混みの中を逆走するように駆け出す。

「おい、桃香!？」

「説明は後! ついてきて!」

「あつたー!」

「良かったあ」

「でも、どうしてここだと分かったんだ？」

発見された場所は、先程立ち寄ったスーパースペースの程近くにある、カスタマーセンター。そこに落し物として届けられていたのだ。

「そつだ。というか、何でさつき教えてくれなかったんだ？」

「そこがみそなのよ」

『え？』

まだ気が付いてないらしい彼らに、あたしは自分の推理を披露する。

「辰弥、さつき聞いた時、受付の人に何て言った？」

「えーっと、まず“落し物で福袋は届いていませんか”だろ。で、無いって言われたから、“他のサービスカウンターにも聞いてみてくださいませんか？”って」

「ああ、そうか。名称か……」

「そついう事」

「そつか。ここだけ“カスタマーセンター”なんだ！」

ようやく愛莉も思い至ったようだ。おそらく、迷子やら落し物やらで対応に追われているであろう受付嬢さんは、仕事を最低限で済ませるだろう。もしかしたら、スーパーと専門店の連携がまだ上手くいっていないのかもしれない。いずれにせよ、届けられているのならここだと思ったのだ。

「紛らわしい事を……」

「まあ、もう一つ根拠としては、愛莉が唯一、福袋から手を離れた時だからかな」

『え』

これにも、三人の声はシンクロした。なんだ、気が付いてなかったのか。

「さつき買い物をした時、かごは愛莉が持っていた。という事は、重たい荷物類は全部かけるはずよね。カートに」

『あ』

「む、無意識だった……」

普段から行っている行動は、案外目に付かないものである。

「でもそれでも見えてる所だろ？」

「それが盲点なのよ」

さっきの原理と同じだ。自分が意識していない所にこそ、真実は隠れている。あたしは繰り返して強調する。

「自分の近くにある、だから安心。これこそが盲点なの」

「どついう事だ？」

「普通の状態なら、そりゃああんなに大きい物落としたら気が付くわよ」

露骨なまでにアクセントを付けたからだろうか。今日はいつになく冴えている愛莉が、また真相に辿り着いた。

「あ……人混み」

「そう。皆、もみくちゃにされたでしょう？ 袋もあつちこつちにひっぱられたから、外れた事に気が付かなくても不思議じゃないわ」
大方、すれ違いざまに外れて、そのまま文字通り人波に流された、という所だろう。

「まあ、届けてくれる人がいたら、の話だったけどね」

「ついてたんだな、愛莉」

「うん、良かった……」

ぎゅう、と今度は絶対に離さないとばかりに、彼女は袋を抱きかかえた。

こうして、色々ありはしたが、最後は丸く収まった。だから、今年も一年良い年になりそうだったのに。

しかしそれはほんの一カ月の間に、覆される事になる。そんな未来を、運命を、あたし達はまだ知らない。

新年早々はつじけん（後書き）

あけましておめでとございます。

新年一発目でございます。

これから物語を加速させていく予定です。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3794s/>

そこに想いがあるのなら

2012年1月5日19時45分発行